

「貧困のない世界をめざして」

グラミン銀行ムハマド・ユヌス総裁 講演会

January 26, 2005

プログラム

1. 開会の辞

東京大学大学院経済学研究科・CIRJE 澤田康幸 助教授
(COE-CEMANO 事務局長)

2. 講演

ムハマド・ユヌス グラミン銀行総裁

3. 総括コメント・質問

総括コメント:

東京大学大学院農業生命科学研究科 泉田洋一 教授

質問:

新保瑠美 東京大学大学院農学生命科学研究科 修士課程

庄司匡宏 東京大学大学院経済学研究科 博士課程

田中希美絵 東京大学経済学部 4年

品田諭志 東京大学農学部 開発政策経済学専修 3年

4. 閉会の辞

東京大学大学院経済学研究科長 神野直彦教授
(代読: 前経済学研究科長・COE-CEMANO ディレクター 岩井克人教授)

共催団体:

東京大学大学院経済学研究科 COE プログラム「市場経済と非市場機構の連関研究拠点」(CEMANO)

<http://www.e.u-tokyo.ac.jp/cemano/index-j.html>

東京大学大学院経済学研究科 日本経済国際共同研究センター (CIRJE)

<http://www.e.u-tokyo.ac.jp/cirje/indexj.html>

ムハマド・ユヌス博士とグラミン銀行について

ムハマド・ユヌス博士は、1940年に東ベンガル州（現在のバングラデシュ南部）チッタゴンに生まれた。チッタゴン大学卒業後、フルブライト留学生として渡米した。そして、ニコラス・ジョージ・スケレーゲン教授の指導の下で”Optimal Allocation of Multi-Purpose Reservoir Water: A Dynamic Programming Model”と題する博士論文により69年に米ヴァンダービルト大で経済学博士号を取得。その後、バングラデシュに帰国、母校のチッタゴン大に戻って経済学部長に就任した。

1974年の飢饉に遭遇し、ユヌス教授はジョブラ村において、椅子の製作に携わっている42の貧しい人々を対象に融資プログラムを試験的に実施した。その成功から確信を得て、1978年に自らの資産を投じて少額無担保融資事業としてのグラミン銀行をNGOとして設立した。そして5年後の83年に事業を組織化し、NGOであった「グラミン銀行」を特殊銀行として創設した。グラミン銀行は、2000年に融資制度を拡大し柔軟性を持たせた「グラミン銀行II」に進化している。

ユヌス博士は、グラミン銀行を通じた貧困削減への功績が認められ、「アジアのノーベル賞」と呼ばれる「ラモン・マグサイサイ賞」を1982年に受賞した。その後、89年に「アガ・カーン賞」、94年に「世界食糧賞」、01年に「福岡アジア文化賞大賞」、04年に「日経アジア賞」を受賞している。また、ノーベル平和賞の最有力候補として名前が挙がっている。

グラミン銀行の成功が経済学研究に与えた影響にも特筆すべきものがある。例えば、ジョセフ・スティグリッツ教授（2001年ノーベル経済学賞受賞者）によって、15年前に既にグラミン銀行成功のメカニズムを定式化する研究が行われている[“Peer Monitoring and Credit Markets,” *World Bank Economic Review*, 1990, 4(3), pp. 351-66]。アメリカ経済学会のデータベースであるECONLITの最新版によると、グラミン銀行に関連する学術研究論文数は少なくとも100以上にも上っており、開発経済学の専門学術雑誌であるJournal of Development Economicsは言うまでもなく、最近でもReview of Economic StudiesやJournal of Political Economy, Economic Journalなどの権威のある学術雑誌にも、グラミン銀行成功のメカニズムを解明しようとする研究が数多く発表されている。現在のグラミン銀行は、グループ責任制度を取らない形に進化しているが、グラミン銀行の成功は、Stiglitz教授らによる「連帯責任制度（Joint-liability）」の理論分析や、マイクロクレジットプログラムの貧困削減効果の計量経済学的計測を大きく前進させるものとなった。さらに、現代の開発経済学教科書は、グラミン銀行に必ず言及しながら、マイクロクレジット・マイクロファイナンスに少なくとも1章を割いている。これは、グラミン・モデルが貧困削減の有効なモデルとして確立したことのあらわれであるといっても過言ではない。

ユヌス博士は

“Bangladesh had a terrible famine in 1974. I was teaching economics in a Bangladesh university at that time. You can guess how difficult it is to teach elegant theories of economics when people are dying of hunger all around you. Those theories appeared like cruel jokes. I then dropped-out of formal economics. I wanted to learn economics from the poor in the village next door to the university campus.”

と述べておられる。しかし、貧困層から経済学を学んだユヌス博士から、今度は経済学そのものが経済学を学ぶところとなったのである。

(文責 澤田康幸)

参考文献

ムハンマド・ユヌス&アラン・ジョリ(1998)『ムハンマド・ユヌス自伝 - 貧困無き世界を目指す銀行家』早川書房

黒崎卓・山形辰史(2003)「マイクロ・クレジットの経済学」『開発経済学 - 貧困削減へのアプローチ』第9章,日本評論社

ムハマド・ユヌス氏による講演
(講演録)

開催日：2005年1月26日

場所：東京大学

司会者：

ムハマド・ユヌス教授は、1940年に東ベンガル州(現在のバングラデシュ南部)チッタゴンに生まれました。チッタゴン大学卒業後、フルブライト留学生として渡米されました。ユヌス教授は1971年に、ニコラス・ジョージesk-レーゲン教授の指導の下、ヴァンダービルト大学で経済学博士号を取得されました。私は、教授の博士論文は「多目的貯水池の最適配分；動的計画モデル(”Optimal Allocation of Multi-purpose Reservoir Water; A Dynamic Programming Model”)」と題されるものであったと知りました。この表題は非常に魅力的で、まさに本日の講演の題にもぴったりのように思います。その後ユヌス教授は1972年に独立したばかりのバングラデシュへ戻り、チッタゴン大学の経済学部長に就任されました。1974年のバングラデシュの飢饉に遭遇したユヌス教授は、1976年ジョブラ村において、クレジット・サービスを提供して竹細工の腰かけを作っている貧しい職人42人に支援するパイロットプロジェクトに乗り出しました。ジョブラ村は現在では有名になりましたが、当時は無名の地でありました。この同地での成功で確信を得たユヌス教授は、1978年にグラミン銀行と呼ばれる貧しい人々を対象とした無担保無利子マイクロクレジット・プロジェクトを立ち上げ、このグラミン銀行プロジェクトは、5年後には政府系機関によって独立系銀行の地位を認められるようになりました。

ユヌス教授は、1984年アジアのノーベル賞と呼ばれるラモン・マグサイサイ賞を受賞されるなど、多く国際的な賞を受賞されておられるだけでなく、さらにノーベル平和賞候補にまでも名前が挙がっています。また、経済学の専門家として教授の主導されたグラミン銀行の成功が、経済学研究に重要な貢献をされたことを簡潔ながら申し添えたいと思います。例えば、2001年のノーベル経済学賞受賞者のジョセフ・スティグリッツ教授は、今を去る15年前の1990年にグラミン銀行の数学モデルを作り上げましたし、米国経済学会データベース(ECONLIT)によれば、マイクロクレジットの分野で発表された学術論文の中でグラミン銀行の成功にはっきりと言及した論文の数は100件を越えています。現在では、開発学入門教科書は、押しなべてマイクロクレジットに関連する項目に少なくとも1章を割いており、ここでもやはりグラミン銀行の成功について明示的に言及されています。即ちグラミン・モデルが貧困撲滅のスタンダード・モデルになったと言っても過言ではありません。

ユヌス教授は、バングラデシュと 1974 年に起こった悲惨な飢饉について、かつて次のように語られたことがあります。つまり、「私はバングラデシュ大学で経済学を教えていました。しかしみなさんは、自分の周りで人々が飢え死にしかけている時に経済理論を教えることがどれくらい困難なことか想像できますか。私には、その時にはそうした理論は残酷な冗談のように思えました。その後、私は公式の経済学からドロップアウトし、大学キャンパスのすぐ近くの村に住む貧しい人々から経済学を学びたいと考えるようになりました」と。

お集まりのみなさん、今日私たちは、バングラデシュそして世界中の村の貧しい人々から経済学を独自に学ばれておられるユヌス教授から、赤裸々な経済学を学ぶ本当に貴重な機会を得ることができました。それではみなさん、ここでユヌス教授を壇上にお招きして、「貧困のない世界を目指して」と題する教授の講演を拝聴したいと思います。

ムハマド・ユヌス教授、グラミン銀行（バングラデシュ）創業者 兼 総裁：

ご紹介ありがとうございます。私は、ここにこうして立ち、旧友の多くにお会いでき非常にうれしく思います。この機会は古き友人たちが再会するのによい機会となりましたし、また私は、ここで新たに多くの友人を得ることになると確信しています。大学のキャンパスに戻り、特に若い人々、人生をかけて問題に取り組み希望を託すべき課題や理念を模索する若い人々に出会うことはいつになっても心躍る経験です。時として世界はあまりにも胸が塞がれる状況にあり、それを目の当たりにして、こんなにも希望のない世界で自分にどんな役割が果たせるかと思ひ悩むこともあることでしょう。私たちが経験してきたこと、つまり私たちが経てきた経験は、興奮の連続、この惑星で人間がどのような可能性を秘めているかを体験した心躍る経験の連続でした。また私たちが、今日の講演の表題でもある「貧困のない世界をどうすれば作れるか」というテーマを掲げたときの周囲の反応についても話しをしますと、周囲から即座に返ってくるのは、「それはまったくユートピア的発想だ。貧困のない世界がありえるなんて考えられない」といった類の反応でした。そうこうしてこの問題に取り組む中に私は、聞き手に少なくとも 2 つのタイプがあることに徐々に気づくようになりました。1 つのグループは「そんなことは不可能であり、できっこない」という完全に懐疑的な人々です。彼らは、「そのアイデアの聞こえは良いけれど、あまりに突飛な考え方であり、人間社会には生まれながらにして貧しい人がいるもので、したがって貧困は必ず存在するものだ」という先入見があるのです。

もう 1 つはその対極にある姿勢で、「そのとおり、それは実現可能だ」と可能性を堅く信じる人々です。私がこのことを強く指摘するのは、私自身がそのグループに属しているからです。私はそれができると確信しています、しかも感嘆符つきで！ 他方で、「それは可能だし将来そうなるだろう、しかしそのやり方によってではない」という考えもあります。つまり中間のグループも存在しているわけです。彼らは一方的な確信を持たず、「できるか

もしれないし、できないかもしれない」と思っています。しかし、あらゆることは信じないかぎり実現することはできません。何かを成し遂げるには、その前にそれが可能だと想像しなければなりません。そうすれば、その目標を達成するのがずっと容易になると申し上げたいのです。

今から私はみなさんにお話をしますが、決してそれは何事かを成し遂げるためではありません。それが可能であると信じて欲しいからです。いかなることも信念がなければ成し遂げることができませんが、これからお話しするのはそうした議論ではありません。私がこれからお話しする内容は、現実に世界で起こっている事柄について私がどう受け止めているかについてであります。私がアカデミズムの世界から飛び出したことによって、改めてこの世界について分かったことの 1 つは、アカデミズムの世界に対して自由に疑問を提起してもよいと感じることができるようになったことです。アカデミズムの世界では、私たちは現実から遠く離れた抽象的な世界で生きていまして、その世界は現実からあまりにも遠く離れておりますから、そこには現実との接点がほとんどありません。実はそのアカデミズムの抽象的な世界は非常に心地よいもので、私たちは、周りのあらゆるものを取り上げていじくり回すことができます。また、美しい論理的な結論を導き出すことも可能です。ある時は自分の頭のよさに惚れ惚れとしているかもしれません。しかし、それは現実とはまったく無縁なものです。なぜなら、あなたは現実から遠く離れて、自分自身の抽象的な世界を作り上げてしまっているからです。その抽象的な世界では、毎日起きていることの潜在性が見えません。ありのままの現実に向き合うためにできるただ一つの方法は、現実の世界とは別の抽象の世界を構築するのではなく、現実の世界を直視することです。これらの 2 つの世界を緊密に結びつけそれから逃避しない、すなわち現実から逃避する余地を残さないようにする必要があります。

30 年前にはマイクロクレジットの世界は存在しませんでしたし、辞書にも見当たりませんでした。それが現在ではよく知られるようになっていきます。ただしこの言葉はさまざまに解釈され、さまざまに理解されているかもしれません。しかし、この言葉が広く知れ渡っているようになっていくことだけは確かです。どうしてそうなったか。なぜ急にわずか 30 年も経たないうちに新しい言葉が生まれ、一般に普及されるようになったのでしょうか。このことは、いかなるものであってもそれが現実に根ざすものであれば、大きな伝播力を持っていることを示しています。それではマイクロクレジットとは何でしょうか。それは、現実に根ざしているがゆえに人々に知られるようになったものであります。

貧困はいずれ世界からなくなる方向にあるのですが、しかしそれは、どこかの頭のいい経済学者が貧困解消のための理論を発見することによるものでもなく、あるいは世界が貧困から脱することができるよう貧者に与えるためのお金をたくさん集めることによる結

果でもありません。そんなことでは貧困の解消などあり得ません。貧困による悲惨な日々
に苦しむ一人一人の人間が立ち上がらなければそれは実現しないでしょう。そしてこれこ
そが私が私自身の経験の点からみなさんにお伝えしようとしている、そしてみなさんの理
解が得られるかどうかを見極めようとしている話であります。

それではグラミン銀行のことをよくご存知ない方々のために、それがどのように始まった
かにつきまして簡潔にお話ししましょう。ご紹介いただきましたように、私は大学で学生に
経済学を教えていました。たまたま私が教えていた大学が都市部ではなく農村部にありま
した関係上、私は、農村の状況をありのままに知ることができました。私が米国から母国
に戻ってこの大学で教えていた時、すなわちバングラデシュが独立を果たし、私が教員の
職に就いたその時期に、私たちの国は深刻な飢饉に見舞われました。飢饉は人々の命を奪
い、何百、何万、何十万という人々が瀕死の状態に陥りました。しかもその原因が病気な
どによるものではなく、食することのできるわずか一握りの米もなかったというただそれ
だけの理由によるものでした。当時の私の状況は、この環境とは全く見当違いの経済理論
を教え、教室の外では現実に直面しなければならないという、とても耐え難い状況でした。

こうしたことから私は、経済学者としてではなく人間として何かできることはないかを真
剣に考えたいと思い始めました。と言いますのも、経済学の教科書を見てもこうした状況
で私ができることや応用できることを全く見つけることができなかつたからです。つまり
私は、たとえ 1 日だけであっても人々の生活が昨日より少しずつ良くなる方法を見出そう
と努力する人間でありたい、かつそういう人柄になりたいと考えました。そしてその道
を選ぶことで私は実に多くのものを発見しました。というのもそれによって私は人々の生活
の現実を直視することができるようになったからです。私はまっさらな状態、なんの準備
もない状態で現実に臨みましたが、すぐに私は、その姿勢が物事を行うのに非常に適した
方法であることを悟りました。人々が自分自身の問題を自分で解決できるよう援助するに
は、この方法が一番適していると分かったのです。

そうこうしているうちに、事態は私が思ってもみなかつた方向へ動き出しました。ある個
別の出来事がきっかけになって、最初の反応が返ってきました。その個別の出来事とは、
竹細工の腰かけ、それもとても美しい竹細工の腰かけを作っているにもかかわらず極めて
貧しい経済状況にある女性との出会いでした。私は、そんなに美しい竹製の腰かけを作っ
ているのに、なぜ彼女がそれほど貧しい状況を脱することができないのかについて理解し
たいと考えました。そして彼女との長い対話を通じて、私は 1 つの教訓を得るに至りまし
た。彼女が一日中働いて竹細工の腰かけを作っても 1 日 2 ペニーしか得ることができない
のは、彼女自身が市場へ竹細工の腰かけを売りに行くことができないからでした。彼女に
は竹を買うお金がなかったので、竹細工の腰かけに使う竹を買うために商人からお金を借

り、その見返りとしてその商人に製品を売らなければなりませんでした。彼女が商人から借りていた額はたったの 25 セントでしたが、彼女は、商人から 25 セントを借りたために奴隷労働を強いられていたのです。目の前につきつけられたこの事実は、私にとって大きな衝撃でした。それは教科書に書かれていないことであり、表面的には覆い隠されていた現実です。目の前にいるのは普通の人間ですが、彼女は毎日この現実苦しんでいます。そしてこのことがきっかけになって、私はその村に同様の状況を抱えた人が他にもいないかについて確かめてみることにしました。

私は学生を連れてあちこち歩き回り、リストを作りました。このリストが完成し詳細に検討すると、さらに驚くべきことが判明しました。リストに上った 42 人が金貸しから借りた金の総額は 27 ドルに過ぎませんでした。私は、このようなことがこの国の中で起こっているとは信じられませんでした。私たちは常々教室で、バングラデシュの開発 5 ヶ年計画について語り、何百万ドルから数十億ドルの投資を行い、これらの投資によってバングラデシュの経済状況や貧困状況を改善する方法について話しあっていました。しかし私たちは、融資を必要とする真っ正直な事業を営んでいるにもかかわらず、1 ドル足らずのお金を手に入れないために苦しんでいる人がいることをまったく知りませんでした。当時は、彼らを支援する何の制度も政策も何もありませんでした。そこで私が最初に取り組んだのは、この 27 ドルを彼らに貸して、金貸しから借りている借金を返すよう指示することでした。そして次に、どこでもいいから一番高く売れるところで商品売りなさいと説得しました。金貸しの言いなりの価格で商品売らなければならない理由はどこにもありません。それが発端となりました。これは期せずして起こった出来事でした。

それにもなっってこまごまとしたことが他にも起ったと思いますが、忘れてしまいました。しかしただ 1 つ忘れがたい出来事がありました。それは、その 27 ドルを受け取った彼らが見たいそう喜んだことです。そこで私は、次の問いをさらに自分に問いかけました。こんなにわずかなお金でこれほどまでに人々を喜ばせることができるのであれば、もっと多くのことを行ったらどうかと。さらに私は、もっと何かできないかと具体的に模索し始めました。その結果、村に住むこうした人々とキャンパス内にある銀行を連携させたらどうかという発想に至ったわけです。私の教科書的知識によれば、銀行とは人々に融資するために作られる機関であり、そうしてくれるものだとは私は思ったからでした。そこで私はある銀行の経営者に対し、「ここにはまっとうな融資案件があります。融資したらどうですか？」と持ちかけました。しかし私が村の貧しい人々に彼の銀行からお金を貸すというアイデアを説明すると、彼は愕然とし、私が言っていることが信じられない様子でした。彼の反応は、「貧しい人々は融資対象としてあまり相応しくないで、銀行が貧しい人々にお金を貸すことはできない」というものでした。

私は彼と論争し、銀行は貧しい人々にも融資をすべきだと主張しましたが、彼は、それはできない相談であると反論しました。「貧しい人々にお金を貸すのは銀行の仕事ではない」と言うのが彼の主張でした。そしてその理由として、貧しい人々が信用に値しないということです。この信用に値しないということは、融資を返済できないだろうという意味と同義で、彼らに融資を与えることを断固として拒絶し、「それは愚かな行為だ」というのです。しかし、貧しい人々への融資は正しい行為であり、そうすることが正しいことであり、銀行はそれを行うべきであるという私の確信はますます強くなりました。私はすぐには問題を解決できなかったため、村の貧しい人々にお金を貸してもらう方法を見つけるために銀行業界の有力者を捜し始めました。その手がかりを見つけるのに数か月かかりましたが、結局のところそのやり方は彼らのやり方、すなわち銀行のやり方にこだわったものでした。つまり私は自らが保証人になると申し出ることにし、「私が保証人になり、契約書すべてにサインするから」と提案し、私がリスクをすべて 1 人で負うことにしてようやく融資金を得ることができました。

この提案をしてから 2 か月間、私は何回も銀行と交渉し最終的に同意を得ました。このような経緯を経て、1976 年に初めて私が保証人となって銀行から融資金を受け、村の人々にそれを渡すことができました。その時に銀行の支店長は何と、「このお金は返ってこないのだから、お金にさようならを言ったらどうですか」と言ったものです。私の方は「賭けてみましょう」と彼に言いました。その結果は、お金は返済され、私は賭けに勝ちました。これはまったく心躍る出来事でした。

しかし、それでもなお銀行の支店長は考え方を変えませんでした。もっと多くの村で同じことを行わなければ、このことは十分実証されたとは言えないと彼は考えていたと思います。そのため私は他の村でもどんどん同じことを行いましたが、それでも彼は考えを変えませんでした。そこである時、彼のこの考え方は彼の固定観念によるものである以上、もし世界中で同じことを行ったとしても彼は考えを変えないかもしれないということに思い至りました。固定観念は非常に苛立たしい心の問題であり、私は何度もこの問題に直面してきました。固定観念はなんと人の心を曇らせることか。私たちは、自分にはものごとがよく見えていると思っていますが、実はよくは見えていないのです。なぜなら、心が物事をありのままに見ることを妨げるからです。私たちの心は、いつも慣れ親しんだ見方に沿ってものごとを見るように私たちに命じます。私たちの心は、いつも「そうじゃない、これはこうだ」と命じるため、私たちは自分流にものごとを解釈します。そのため、絶対に周囲の影響を受けず、絶対に自由であろうと誓っても、現実をありのままに見ることは非常に難しいのです。私は固定観念なしの心でみなさんに呼びかけたいと思います。

しかし、私は、固定観念のない心と呼ばれるものは存在しないと思っています。これらの

固定観念は、私たちが成長する過程、私たちが経験を積む中で形成されますので、この点で大学が非常に重要な役割を果たす場所ですし、学術研究機関もまた非常に重要な役割を果たします。私たちの固定観念のほとんどが自分の属する学術研究機関で形成されるからです。例えば私が 教授に指導を受ければ、それ以降の人生はずっと 教授の影響を受けるとするのが一般的です。私は、彼の話し振りをそのまま引き継ぎ、彼の議論の仕方を引き継ぎます。というのもそれが物事を学ぶ方法だからで、こうしたことから、私たちがしかじかのものを「学派」と呼ぶようになるのです。しかし、これは単にある信念よりも別の考え方のほうを信じると言っているに過ぎませんので、どれほど多くの主張をぶつけてみても相手は納得しないでしょう。このように、日々の生活の中での固定観念は、私たちが向き合い、現実を前に少しでも変更できるかを見極める必要のあるものです。しかしそれが非常に難しいことなのです。そこで私は、将来の学術研究体制においては、教師自らが学生たちにとってのテーマになってしまうようなことのないよう望んでいます。すなわち、教師の人物よりもむしろその考え方が重要な問題になることを望むわけです。しかしそれが非常に難しいことで、私たちはそれを行う方法をまだ見出しておりません。

私たちが貧しい人々に融資を行った時、私たちはそれに携わった銀行の支店長を通じて人々の固定観念がどのようなものかについて理解しました。そしてこのやり方を変えないかぎり、そこから脱することはできないことが分かりました。私は現実の狭間に閉じ込められているのも同然で、既存のルールのはまり、既成概念のはりに縛られている状態でした。そしてそこから脱する方法は、新しい銀行、貧しい人々だけにお金を貸す新しい銀行を設立することでした。そこで私は、それを実現する方策に取り組み、銀行を設立する許可を私に与えるよう政府に働きかけました。その後再び長い物語が続きますが、私たちは、1983年になって設立許可を得て、グラミン銀行と呼ばれるひとつの独立した銀行を設立することになりました。ついに私たちは、自分たちの望むように運営できる自前の銀行をついに持つことができ、天にも昇るような気持ちでした。今や私たちは、貧しい人々のためには役に立たない古いルールや古い手順に縛られる必要がなくなったのです。こうしてグラミン銀行は生まれ、私たちは拡大に次ぐ拡大を続けています。

その一方で、相変わらずグラミン銀行を批判する人々、その可能性を信じない人々、貧しい人々にお金を貸すことを愚かな試みだと思える人々もあり、「これまでそんな前例があるか？そんなことをした者は歴史上誰もいなかった」と非難をしています。ではなぜ私たちは貧しい人々にお金を貸すことをしなければならないのでしょうか。私たちは、「私たちが正しくなければしかたがない、そのときは観念して破産しよう」と考えていました。しかし幸いにも私たちは破産せずに日を追うごとにその基盤を強化し拡大を続け、それにとどまらず、その後、このアイデアはバングラデシュ以外にも広がり始めました。当初、多くの人々は、バングラデシュで成功したとしても、他の国ではうまくいかないと言っていま

した。その根拠は、「バングラデシュは非常に奇妙な国であり、この国ではありとあらゆる奇妙なことが起こるもので、これもそのうちの1つだ」というわけです。

しかし私たちは、これがバングラデシュ以外にも可能であると信じ、またそうなることを望んでいました。幸運にも、現実には批判者の期待とは異なる状況を呈しました。マレーシアのある教授がバングラデシュを訪れ、グラミン銀行の内容とその時点までにグラミン銀行が上げた成果に接して非常に興奮して、「マレーシアでもできるだろうか」と問いかけました。私は、「やってみてはいかがですか」と応じ、長い準備の末にマレーシアの事業に乗り出し順調な進行を見ています。このようなマレーシアでの経験から、初めて私たちはバングラデシュ以外の他の国でもうまくいくことを実証することができました。これに対し、おそらくそれは相手がイスラム教徒であることと関係があるのではという異論が出てきました。成功するにはイスラム教の国でなければならないというわけです。他の例がない以上、当時私は反論することができませんでした。

非常に幸いなことに、次の成功例の国はフィリピンでした。そのため、私は少なくとも次のように言うことができました。「ほらごらんなさい。今度はフィリピンですよ。フィリピンはキリスト教の国、カトリックの国ですよ」と。それに対しても、「おお、おそらく、それはアジア的な現象であり、これは、非常に困難な状況を生き伸びなければならぬアジアでしか起こらない」という反応が返ってきました。しかし、アフリカやラテンアメリカの多くの国々がこのシステムを採用し始め、懐疑的な人々も、これがアジア的な現象だという当初の説明を盾にすることができなくなりました。すると今度は、「これらの貧しい国々はあまりにも貧しすぎる、彼らは非常に絶望的な状況にある。だからこそこうした幸運なことが続いたのだ」と議論を巻き返しにかかりました。ところが米国のある州の知事が、自分の州でグラミン・プログラムを立ち上げるのを助けてほしいと依頼してきました。その知事こそはアーカンソー州の知事で、偶然にもその知事の名前はビル・クリントンと言いました。当時の私は、この人物がどんな人物になるのか全く見当が付きませんでした。

私はアーカンソー州に赴き彼と話しをしましたところ、彼と彼の妻のヒラリー・クリントンは二人とも非常に強い関心を示し、「おお、アーカンソーにはこれが必要だ」と言ってくれました。その結果私たちはアーカンソーでもグラミン・プログラムを立ち上げることに踏み切りました。したがって少なくとも今では、グラミン・プログラムを実施している豊かな国が存在する以上、それが貧しい国々に限られたものではないと言うことができます。その後、この事業は欧州の多くの国々、ノルウェー、フランス、英国、ポーランド、その他の多くの国々にまで広がりを見せ、このようにグラミン・プログラムは世界中に広がっているのです。

疑問点は何でしょうか。グラミン・プログラムの何がそれほど特別なのでしょうか。その特殊性は、グラミン・プログラムの最初の発端、私が既存の銀行システムを非難、批判したときにさかのぼります。私の批判は非常に単純なものです。私の主張は、既存の銀行業務システムが、貧しい者が一切近づけない仕組みになっているというものでした。それはたまたまそうなのではなく、意図してそうなのです。「ごめんなさい、あなたたちのことを忘れていました。銀行システムは、元来がそのようなものではありません。そんな仕組みになっているのです。貧しい者は中へ入ることができません」というものでした。

それ以上にバングラデシュの私の友人の銀行家たちが受け入れたがらなかったもう1つの批判は、銀行システムが貧しい人々を拒絶するだけでなく、女性をも拒んでいるという点であります。私の批判に対し彼らは非常に衝撃を受け、「なぜあなたはそんなことを言うのか」という問いが返って来ました。「いやあ、それが現実だからですよ」と私は答えましたが、彼らは、「私たちは女性を拒んだりしていない。私たちはいつでも女性に融資を行っている」と自己弁護に努めました。私は「しかし、実績がそれを示していないではありませんか」と言いました。私は、「バングラデシュの銀行からお金を借りている人を全部数え上げてその男女別構成を見て、たとえ1%でも借り手が女性であれば私はこの主張を撤回します。その時には、あなたがたが実に素晴らしい人たちだと言いましょし、あなたたちは女性に対して公平だと言えるでしょう」と答えました。しかし彼らには答える術がありませんでした。こうした議論は1970年代半ばの頃のことでした。

今は2005年です。しかし私は、現在でさえ1%の数字を示すことができないと思います。システム自体に問題があるのです。その時はたまたまそうならなかったただとか、銀行業務がそれほど進歩していなかったのだとかのいろんな言い訳がありましたが、2005年の今になって、そのような言い訳は通用しません。つまりこの弊害は、システムに組み込まれているとしか言いようがありません。事業を始めた当時、プログラム中の借り手の半分以上を女性としたいと考えました。私には特段の論拠も、判断も下したわけではありませんが、これは意図してそういう方針をとりました。男女平等、男女の多様性という観点からも借り手の半分以上を女性とするのになんの不都合があるのでしょうか。私は、女性を除外するのは不公平だと思いました。しかし私たちが事業を始めた当時、この仕事を一緒に行っていた私の同僚、友達、学生たちは私のこのやり方に不満でした。彼らは、「あなたが女性を借り手に加わらせることを主張しているが、女性がそれを望まない以上うまくいかない。彼女たちは我々から融資を受けたいとは思っていないのだから」と言ったものです。

そこで私は「あきらめないでがんばってみましょ。待ってみましょ。様子を見ましょ

う。これには時間はかかります。女性は、これまでの人生で自分のためだけに融資を得る経験を持っていないのですから」と言いました。女性たちが、すぐにでも受け入れてお金を借り仕事をするとはとても考えられませんが、私たちの伝統、文化、および考え方にも全く反しています。私たちはここでもはや、さらなる価値観や習慣の壁に突き当たり、それに挑むことになりました。女性たちは「いいえ、お金は私にではなく私の夫に与えてください。お金について私は何も分かりません。なぜ私にお金を貸したいのですか？」と戸惑います。女性たちのなかには、「私はこれまでお金に触れたことがありません。また今さらお金には触れたくもありません。お金に触れることは問題で、お金は夫にまかせています」と言う人もいました。彼女たちは、なぜお金を受け取らないのかについてのありとあらゆる抵抗を続けました。

私は、スタッフたちに対しこう言い聞かせています。「さあ、彼女たちが感じていることを聞いて受け止めてください。でも、彼女たちがお金を受け取ることがなぜ重要かを説明し続けてください。いつか誰かがお金を受け取ることでしょう。そしてその女性が成功して事業がうまくいけば、お金を受け取ったからといって彼女の頭に空が落ちて来たりしないことを理解してくれるでしょう。そうすれば彼女の隣人がお金を受け取ることに関心を持ち始めることでしょうし、他の女性も興味を持つようになれば、徐々に恐怖心も薄れいつの日かそんな恐怖心もなくなるでしょう。そしてお金を受け取り、お金を稼ぐこと、しかもそれを自分自身で行うことがいかに心躍る経験であるかを理解するようになるでしょう」と。

グラミン銀行における女性に対する融資比率をフィフティ・フィフティのレベルに引き上げるのに私たちは6年かかりました。しかし一旦それが達成できると、それによって2つの点で人々の生活がまったく変わったことがわかりました。第一に、女性を通じて世帯にわたったお金は、男性を通じて世帯にわたったお金に比べて、同じ金額であっても、さらに多くの有益な効果をもたらしたという点です。ある世帯では女性を通じてお金を融資し、別の世帯では男性を通じて融資しました。その違いは歴然としています。みなさんはきっと何がそれほど違うのだろうと推測しておられるでしょう。一番の違いは子どもに対してです。女性がお金を受け取った世帯では、子どもがそのお金の直接の受益者となりました。そうならなかった事例はありません。しかし男性が受け取った場合は、子どもは受益者にはなりません。女性たちは常に長期的なビジョンを披瀝し、彼女たちはいつでも将来のために何かを作り上げようとしています。女性たちは常に自己犠牲的なところがあります。それは、彼女たちがお金から得られるものを必ずしも自分のために使おうとはしないという意味であり、女性は、家族、つまり子ども、夫、母親、両親、その他家族の誰かを喜ばせたいと考えます。そして自分を一番後回しにするように考えます。

借りたお金を使って稼いだお金で女性たちが何をしたいかについての優先リストを見れば、ほとんどの場合に、そのリストの中で子どもが最優先になっているのを見てきっと安心することでしょう。子どもたちが第一の受益者となります。その後他の人が続きます。そして最後が誰かを見れば、ほとんどの場合それは彼女たち自身になっています。リストに自分のことを載せていない場合すらあります。男性が余分な収入を手にした場合の想像上の優先リストを見れば、男性自身が彼の友人がリストの最初に来ると考えてまず間違いないでしょう。そしてさらにリストを下がっていくと、家族の他の人たちがリストのごく下の方に顔を出てきます。男性には我慢強さが欠けています。男性はすぐに得たお金で楽しみを買おうとし、明日あるいはその次の日を待つような気持ちが少ないのです。

私たちは毎日のように両者の違いに気づかされました。そして「なぜこのフィフティ・フィフティ・ルールに固執しなければならないのだろうか」と考えるようになりました。「家族にできるだけ役立つようにというのが私たちの真の意図であるならば、この方針を変えるべきではないか」という具合に考えたわけです。そして私たちは即座に方針を転換し、今後女性に重点を置くという決定を下しました。その後私たちは、段階的にはありますがごく短期間の間に 60%から 70%、80%へと女性の比率を引き上げ、そして 90%から 95%という比率が私たちの歴史の一部となるまでになりました。現在グラミン銀行の借り手は 400 万人に達していますが、そのうちの 96%は女性です。またこの銀行、グラミン銀行は、人々が通常忘れられている点ですが、借り手によって所有される形態をとっています。つまり、貧しい者の銀行、特に貧しい女性のための銀行であり、貧しい人々が所有する銀行なのです。彼らがこの銀行の主役であり取締役を務めています。この銀行について決定するのはこの取締役の座に就いている人であって、他の偉い役員か誰かではありません。この銀行から借りる大半の人達も同じ女性たちで、3年ごとに選挙が行われ、彼女たちが銀行の方針を決定する取締役会に代表を派遣します。

また、これは小さな銀行ではなく、現在では年間 5 億ドルを貸し出しています。さらに特筆すべきは、貸し出すお金の金額だけでなく、その返済率自体が伝説となっていることでしょう。グラミン銀行の回収率はほぼ 100%の 99%以上です。貧しい人々がお金を借り、事業に投資し、お金を稼ぎ、金利を含めて確実に銀行に返済しています。

このことについて、銀行の理論は何を教えてくれるのでしょうか。今でも銀行理論は、貧しい人々が信用できないと言うのでしょうか。今でもまだ、こうした理論を盾にしようとするのでしょうか。むしろ違う問いを立てるべきなのではないのでしょうか。人間が銀行に値するかどうかではなく、銀行が人間に値するかどうかというように。そして、グラミン銀行は世界中に広がり、貧しい人々が他のどのグループよりはるかにクレジット・リスクが少ないということを何度も何度も実証してきました。これはもはやバングラデシュだけの

ことではありません。世界中のあらゆるところで、それが可能であることを示しています。

しかしそれでも、銀行業と金融サービスのグローバルな状況を見れば、世界の人口の半分は金融サービスを利用できていないのが現状です。すなわち世界の人口の半分は銀行からお金を借りることができません。彼らにはその資格を認められていませんし、彼らは貯蓄が少なすぎ、受けられる融資があまりにも小さいことから、銀行への貯蓄さえ受け入れてもらえません。彼らは取り残されているのです。融資が人々の生活にとって特に重大な状況のもとでは、金融機関があなたにお金を貸すことを拒絶するか、あるいはあなたに金融サービスを供給することを拒絶する場合、それは死刑宣告のようなものです。あなたは経済的な死刑宣告を受けたのです。そうすると、経済的に見てできるのは他の人のために奴隷として働くことだけです。金融機関が扉を開かないかぎり、独力でスタートを切ることはいできないというのが私が何度も持ち出している設問です。つまり、既存のシステムが不公平なのであって、人には責任はないのではないかということです。

私は貧困の問題に沿ってこの問いを問いかけています。つまり貧困の問題は、貧困は貧しい人々が作り出したものではないということです。貧困は貧しい人々の創造物ではありません。「私が貧乏になったのは私のせいであり、だから私は貧乏になりました。これが私の状況です」などと言いますが、しかしそうではないのです。私に言わせれば、貧困は、私たちが作り上げたシステムによって作り出されており、私たちが作り上げた制度、私たちが作り上げた政策、私たちが自分たちのために作り出した概念枠組みなどから成り立つシステムが貧困を作り出しているのです。貧しい人がこんなにも多いのは、こうしたシステムにおいて私たちが犯した過ちが大きいからですし、その結果として、こんなにも多くの貧しい人が生まれているのです。

ではどうすれば貧困を終わらせることができるのでしょうか。どうすれば貧困に終止符を打てるのでしょうか。それには貧困を作り出している制度を変えることです。貧困を作り出している政策を変えることです。貧困を作り出している概念枠組みを変えることです。言い換えれば、社会の設計図それ自体を書き直さなければならないのです。私たちがそれを拒み、このままいくばくかのお金を貧しい人々に与え続けても、それでは貧困を解決しないでしょう。たとえ今日、貧しい人々にいくばくかのお金を与えることができたとしても、現在のシステムが毎日機能しているかぎり、明日にはその同じシステムがより多くの貧困を生み出すからです。

具体的な例を1つご紹介しましょう。それは金融機関です。私は、金融機関が現状のまま世界人口の半分に扉を閉ざしているやり方を踏襲するのを許すかぎり、貧困を解決するための成案は得られないと思っています。そのことを強調するためにこそ私は、このこ

とを人間の事実として認めるべきだと言いつけています。誰もが融資を利用できる金融機関を作るとは人間の社会の責任ですし、またそれは可能です。それが、グラミン銀行が実証したことです。それは可能なのです。発足当初、「5年や10年くらいは可能かもしれない。しかしその後はうまく回らないことが明らかになる。成功するようなやり方ではない」と言われました。しかし実際には現在もしっかりと運営されており、収益も多く、いまだに拡大を続けています。

またこうも言われました。「確かにそうかもしれない。あなたは貧しい人々にお金を貸すことができるだろう。しかし、そうした金融機関は持続できないだろう」と。その意味するところは、こうした金融機関は、貧しい人々にお金を貸すことができるように、常にチャリティーとして誰かからいくらかのお金をもらわなければならないということを指摘しているのです。しかし、それはグラミン銀行の現実とは異なります。グラミン銀行は、毎年5億ドルという貸し出し資金をどこから調達しているのでしょうか。私たちは、毎年5億ドルを融資していると述べました。ではそのお金はどこから来るのでしょうか。大金持ちの篤志家がグラミン銀行にお金を出しているのでしょうか。いいえ。それではバングラデシュ政府がこのお金をグラミン銀行に拠出しているのでしょうか。いいえ。それではそれはどこから来ているのでしょうか。

それは銀行の預金から来ます。私たちは銀行として預金を預かり、お金を貸します。これは古典的な銀行業務であり仲介業務です。しかし、グラミン銀行の場合、これは興味深い仲介方法に基づいています。私が言っていることは事実そのままですが、しかしこれには少しばかり説明が必要です。グラミン銀行が預かっている預金の70%はグラミン銀行の借り手が預けたものです。したがって、グラミン銀行の借り手はグラミン銀行に貯蓄を預けながらグラミン銀行から借りています。したがって、銀行が1ドル融資するごとに、そのうちの70セントは、貸し付け人のお金から出ていることとなります。毎年、貯金が多くなるにつれて、女性たちの負債も増えていきます。人々は私たちに「では彼女たちはなぜお金を借りるのですか。彼女はお金を持っているのに」を尋ねます。

事実そのとおりです。しかしあなたが自分のことを振り返れば、同じことをしていることがお分りになるでしょう。あなたも、お金を持っているにもかかわらずお金を借ります。というのも、資金運用からすると、融資で仕事を継続しながら預金の形や現金でお金を持っていることが利益になるからです。グラミン銀行では、借り手が預金を継続する場合、彼女たちは長期資産形成目的でそれを行っています。このように彼女たちは、将来に備えて資産を形成しながら、グラミン銀行から借りることにより短期的な環境で経済活動を続けています。それは至極当を得たことで、全員がそうしています。誰がそう助言したわけでもありませんが、彼女たちはそのことを理解しているのです。彼女たちはグラミン銀行

からお金を下ろさず、「私はお金を借りる必要がないのにそうするのは、それが他のどの方法よりも早く生活をよくすることができるからです」とこんな風に言うのです。これが、グラミン銀行の仕組みです。

他にもいろんな見方があります。みなさんの中にもお聞きになった方がたくさんおられることでしょう。「でもこの方法は、貧しい人々の中の一握りの上層部にしか当てはまらない。貧しい人々の中にも、トップレベル、中間レベル、底辺レベルがあり、トップレベルにしかマイクロクレジットは当てはまらない」と。私たちはそうした人々にグラミン銀行がどのようなものかをお知らせします。私たちはずっと最底辺の貧しい人々と事業を進めてきました。それではなぜ第三者が同じことを繰り返し言い続けるのでしょうか、「マイクロクレジットは貧しい人々のトップレベルの人々にしか向いていない」と。誰でもグラミン銀行はどのように始まったかについては知っています。私たちは 42 人の人々に 27 ドルを貸し付けるところから出発しました。融資 1 件あたり 1 ドル未満という微々たる額であったわけです。彼らは貧しい人々のトップレベルの最上層の人々ではありませんでしたし、これが私たちのやり方です。しかし第三者達は自分たちの主張に固執し、その説を曲げようとしません。

そこで私たちは昨年、これまでに何度もやってきたけれども集中的には実施したことのない事業に取り組みました。私たちは物乞いに融資を与えるという独自のプログラムに着手したのです。他の人々に物乞いをすることで生活している物乞い達に対する融資です。バングラデシュでは、農村地帯で物乞いをすると言うことは、村をあちこち歩き回っていくばくかの米を恵んでもらう女性あるいは男性を意味します。では私は彼女たちに対してどうするでしょうか。まず彼女たちに一握りの米を与えたとします。彼女たちは、何も食べるものがないので、丸一日各戸の戸口をノックして回ります。そうすればいくらかの米をもらうことができます。1 日が終わった時点で彼女の手元には、2 キロあるいは 2.5 キロ程度の米が集まっているでしょう。それは翌日までの彼女の家族と彼女自身の生き延びる手段になります。さらにお米が必要になると、再びお米を集めに戻ります。これは 1 日だけのことで 1 週間だけのことでありません。彼女は、他に生き延びる術を見つけることができないうために死ぬまでこれを続けるのです。バングラデシュにはこうした物乞いがたくさんいます。そこで私たちは、物乞いに焦点を当てることとしました。

私たちはスタッフに、ただの物乞いを探しているのではなく、最も困難な状況にある物乞いを探しているのだと伝えました。最も困難な状況とは、物乞いをしているのがその女性だけでなく、その両親も物乞いで生きていた人です。そして、当人が物乞いで、親もかつて物乞いで、祖父母も物乞いだった人、すなわち 3 世代にわたり物乞いである人を見つけたいと頼みました。なぜ私たちはそのような困難な人を選びたいと考えたかと言いま

すと、トップレベルの貧しい人々だけでなく、誰にとってもお金が役立つことを実証したいと考えたからです。私たちといっしょに仕事をしたいという物乞いが見つかった場合、彼らにどんな話をするのかと言いますと、私たちは彼女たちに、「あなたは毎日各戸の戸口をノックして回っていますが、これは非常に大変な仕事です。雨の日、強い日差し、炎天下、冬の日など大変でしょう。しかし、生き延びるにはそれしか方法がないためにそうしているのです。大雨に見舞われるモンスーンのときでさえ、食物を見つけなければならぬあなたは出かけて行きます」と話しかけます。

さらに私たちは彼らに対し次のように持ちかけます。家から家へ物乞いをして回るときに、何か商品を選ぶようにしたらどうですか。「運ぶものはクッキーとか、トローチ、キャンディー、子どものおもちゃなどです。とにかくあなたは家を回って歩きますが、そのとき、箱を持って行くのです。戸口に立ったときあなたは箱を開き、その家の子どもたちや主婦に何か売るものを持っていることを示すことができます。そのうち何人かは、あなたから何かを買うでしょう。彼らを買ってくれば、それがあなたのビジネスになります。あなたを助け、あなたからものを買おうという人が出てくれば、いつかあなたはこれで商売しようと思えるときがきます。その日からあなたは物乞いをする必要はなくなります。あなたは行商人です。あちこち歩き回り、他の人々にものを売るのです」と説明すると、彼らはそのアイデアに賛意を示しました。

昨年初め私たちは、これがうまくいくかどうかを見極めるには、おそらく3,000人から4,000人の物乞いが必要だと考えました。しかし私たちに寄せられた期待の圧力は非常に大きく、昨年末には、プログラムに25,000人以上の物乞いが殺到しました。物乞いの人たちに対する典型的な融資額は9ドルです。圧力があつたと言いましたが、このように言えることには大きな感慨があります。しかしこの圧力は、本当にはどこから来たのでしょうか。最初の圧力はスタッフからのものでした。スタッフ達は、物乞いの人たちが発奮するのを見て大変興奮し、「自分のプログラムで物乞いを1人担当してもいいですか」などと尋ねてきました。私たちはそれを選別的なやり方で行おうとしていましたところ、誰もが1人ずつ物乞いを担当したいと申し出るようになりました。そして最終的には、「グラミン銀行スタッフが全員物乞いを1人ずつ担当するが、それ以上はダメだ」という結論にし、彼らは大喜びでした。当時グラミン銀行には12,000人のスタッフがいましたが、参加する物乞いは12,000人以上になり、少なくとも14,000人程が集まりました。私たちは12,000人足らずだと思っていましたが、計算するとなぜか14,000人も集まり、スタッフの中から、実は自分は複数の物乞いを引き受けていると認める証言が出てきました。2人以上担当しているスタッフが存在することが判明したことで、他のスタッフからもなぜ彼らは複数の物乞いを担当しているのか、なぜ私たちは1人だけなのかという声上がり、私たちは目標を2人に変更することにしました関係上、その年の終わり時点でプログラムに参加した物乞いは

25,000 人になりました。1 人あたり 2 人なら 24,000 人なので、2 人以上担当している人もわずかながらいることになります。

スタッフは、このわずかな額のお金で物乞い達の生活がどんなに変わるか実感し、非常にやる気になりました。そしてスタッフは、自分たちが担当している女性たち、すなわち担当している物乞い達に愛着を感じるようになりました。中には、物乞いの生活から完全に脱した人たちもいます。私たちはスタッフにさらに大きな課題を与え、実際に成功かどうかは来年の 12 月にならないと分からないと諫めました。昨年 12 月時点で私たちは 25,000 人を対象として物乞いプロジェクトを始めたわけですが、今年 2005 年 12 月になってこの 25,000 人を振り返り、これらの物乞いのうちの半分以上がもはや物乞いの生活から脱して、自分で生計を維持し、事業を行い、もっと多くのお金を求め、事業を拡大していれば成功と言えるでしょう。そうなれば、彼らの生活に関わる何かに触れることができたことになり、それこそ私たちにとって大きな喜びとなります。さらに、グラミン銀行の融資が貧しい人々のトップレベルの人々にしか役立たず、低レベルや中レベルの人々には役立たないと主張している人々に対してもビッグニュースとなるでしょう。人間は自分の考え方に固執しがちで、何を提示しても容易には自分の考え方から脱しようとしません。これが、ずっと私たちが直面している問題です。

私はもう 2、3 点簡単に付け加えてからグラミン銀行についての話題から離れ、私がお話したいと思っている全般的な理念について触れたいと思います。みなさんの中にはすでによくご存知の方もおられると思いますが、グラミン銀行には、発足当初から「16 の決定事項」と呼ばれるものがあります。その 1 つが、子どもたちを学校に通学させ、学校で勉強を続けられるようにするということです。バングラデシュは識字率が低い国です。貧しい人々だけに着目すれば、識字率の低さは圧倒的です。私たちの 400 万人の借り手のうちのおそらく 95% の人々は読み書きができません。こうしたことから、1970 年代はじめのグラミン銀行の発足当初から、私たちが促進しようとしているものの 1 つに識字率の向上を挙げてきました。グラミン銀行に来た人はこれら 16 項目の決定を細かく検討します。いずれも私たちではなく彼ら自身が自分に対して適用するものです。例えばその判断とは、子どもたちを学校に通学させ、彼らに学校での勉強を続けさせることです。私たちが大々的にこの考えを普及させた結果として、子どもがみな学校に通うようになりました。私たちの発想は、貧しい家族の次の世代には違う生活を送らせる、すなわち私たちからお金を借りている第一世代の生活を繰り返させないということです。彼らがわずかでも親たちよりも余裕にある生活が送れるようにすることが大切で、そのためには、子どもたちを学校に通わせるべきあると考えました。

当時の私たちの考えは、子どもたちを少なくとも小学校には最後まで通わせることができ

るだろうというもので、私たちは小学校以上の教育を期待していませんでした。貧しい人々は、子どもたちを早く外に出してお金をどこかで稼がせたいと考えており、彼らが子どもを働かせずに小学校よりも上の学校に行かせることは非常に困難です。しかし数年後、私たちは、子どもたちが小学校に通っているだけでなく、多くの子どもたちが高校に進学しているのに気づき始めました。さらに数年後、その子どもたちの多くが高校だけでなく大学にまで通うようになりました。そしてその 9 年後私たちは、グラミン銀行の融資を受けた子ども達が、医科大学に入学し医者になったり、工業学校に入ってエンジニアになったり、大学に入ってトップの専門職に就いたりするのを目の当たりにしました。私たちは、「おお、神さま、私たちが行ったわずかな励ましでこんなことが起こるとは思いもよりませんでした。彼らの子どもたちが大学に通っているのです。」と言わずにはいられませんでした。

この現実を目の当たりにして、私たちはすぐに 2 つの決定を行いました。1 つは奨学金を導入することでした。これによってグラミン銀行は、学校で非常に優れた成績を上げており、あらゆる種類の家庭の子どもが通学している学校でトップの成績の優秀な学生たちに、どのレベルの学校かにかかわらず奨学金を与えています。しかもクラスでトップの成績を上げるのは、最も貧しい人の息子や娘が多いのです。私たちは彼らに奨学金を与えることでそのことを祝ってあげたいのです。このようにしてグラミン銀行は毎年、7,000 件以上の奨学金を与えています。これは、その才能と学習能力を認められて、銀行からいくらかのお金を受け取るというのは、まだ小さな子どもの人生にとって、とても大きな出来事です。その後私たちが行ったもう 1 つの決定は学生融資です。技師、医者、大学の専門学部といった専門資格を得るための学校に入学した人は、必要な資金をグラミン銀行から得ることができます。そのおかげで子どもたちは、親が高等教育の費用を賄えるかどうかについての心配をする必要がありません。私たちは彼らに、「心配しなくていいよ。君たちは学業に専念しなさい。そして受けることのできる最良の教育を受けなさい。そうすれば、私たちはあなた方の学費の面倒を見ましょう」と伝えます。このようにして私たちは子どもたちに学費を与え、今では、バングラデシュのすべての大学で、グラミン銀行の支援する家族の子弟を見つけることができるようになっていました。子どもたちは、グラミン銀行の学費融資を得て、あらゆる大学やあらゆる専門学校に在学しています。

私たちの考えは、このような第 2 世代が育てば、貧困へ逆戻りすることはないだろうというものです。こうして見ると、貧困から人々を脱却させることは、私たちが考えるほど困難なことではないようです。しかし本当に難しいのは、貧困状態に戻らないようにすることです。というのも、貧困状態に逆戻りするのは非常に簡単なことだからです。バングラデシュでは、一度サイクロンに見舞われれば、一度洪水に襲われれば、それだけで多くの家族は貧困状態へ押し戻されます。こうしたことから私たちは、貧困に逆戻りすることなく貧困ラインよりも上の生活を維持し、簡単に立ち直れるようにするためにも、第 2 世代を

しっかりと育成することができればと考えています。だからこそ第 2 世代が重要になってくるのです。第 2 世代に目を向けたので、もう 1 つの魅力的な面である情報技術の力についてもお話ししましょう。私たちは、できれば、マイクロクレジットと並んで、情報技術を貧しい人々に提供できればとても素晴らしいことだと考えていました。そこへバングラデシュ政府がバングラデシュで携帯電話会社を設立するいくつかのライセンスを市場に出したことから、携帯電話会社を設立する機会が到来し、携帯電話のライセンスを申請することとしました。

数年にわたる手続き上の混乱もありましたが、ついに私たちはライセンスを得て、それをグラミン・フォンと名づけバングラデシュの村々へ持っていきました。私たちは 1997 年にプログラムを開始しましたが、政府の人たちには、私たちが携帯電話会社を希望するのは、当時電話がなかったバングラデシュの村で携帯電話を使用できるようにしたいからだと説明しました。そして、グラミン銀行の融資先の貧しい女性の手让这些の電話サービスを委ねました。グラミン銀行がお金を貸し、彼女たちが電話を買い、電話のサービスを売ってお金をもらいます。このシステムに対し、第三者からは「頭がどうかしている」と言われました。「そんなサービスにお金を払う人はいないだろう。女性たちはなぜ電話サービスを売らなければならないのか。誰もそのお金は払わないだろう。最後には、彼女たちはお金を無駄遣いすることになるだろう」などの批判がありましたが、私は「そうではない」と言明しました。「私たちの考えでは、親戚に電話をしたり、医者に電話したり、市場価格を知るのに市場に電話するためなどに私たちの電話を使いたいと考えている人々はたくさん存在し、彼女たちは必ず多くのお金をもうけることになるでしょう」と反論しました。この議論は 1997 年の頃のものですが、現在、2004 年末から 2005 年はじめにかけて、バングラデシュに 10 万人を越えるテレフォンレディーが存在しています。彼らは全員が村々の出身者です。私たちは、彼女たちが電話サービスを売るので、テレフォンレディーと呼んでいますが、あなたが世界中に電話したい、あるいはバングラデシュ国内のどこかに電話したい場合、彼女のところへ行ってお金を払って電話をかけます。これで彼女たちは、ある程度のお金を稼ぐわけです。いたって単純です。

私たち大学の教官は、彼女たちに電話サービスという商売ができるかどうかについて何日もかけて議論することができます。しかし、電話が 1 台あれば、そんな議論は打ち切って行動に移すことができます。電話は、貧困から脱出するための確実な手がかりであり、こうして電話機は誰もが 1 台は持ちたいと願う切望の的となりました。それゆえ毎日私たちは、彼女たちに渡す電話の数を増やして電話への強い需要に対処しています。バングラデシュは国民の 70% が電力にアクセスできない状態にある国です。いまだ電気は都市部の人々の特権にしか過ぎません。村民は電気をほとんど見たことがありませんし、電気が使えないバングラデシュにどうやって有線電話を引くことができるのでしょうか。

私たちのそれに対する解決策は実に手っ取り早いものでした。私たちは、グラミン・エナジーという会社、すなわちグラミン・ソーラー・エナジー・カンパニー、を設立しました。この会社はソーラーパネルを売る会社です。私たちがテレフォンレディーに電話を売るときにしなければならないのは、電話といっしょにこのソーラーパネルを渡すことだけです。彼女たちは、都市では電話に太陽電池パネルを使用しないことすら知りません。彼女たちは、電話がソーラーパネルや周りの色々な機器といっしょになっており、一体のものだと思っています。また電気が切れることもありません。彼女たちは自分で電気を起こすことができるのです。神さまのおかげで太陽はいつでも輝いており、しかも日光は燦爛と降り注いでいます。この光で彼女はバッテリーを充電し、また彼女は事業を続けることができます。ここでもやはりその解決策は、情報技術から発生してきています。

その他にも、さまざまな分野で情報技術は人々の生活を変えることができます。しかし今日、情報技術を設計している人々は、それがどれくらい人々の生活を変えることができるかという次元には着目していません。したがってこれは、私たちが着目しなければならない次元の1つであります。私たちが何かをする必要があると考え、かつ私たちがささやかながら努力してきた次元は医療の分野です。ここまでに述べてきましたように、私たちが融資の対象として研究してきた家族のほとんどは、10年から12年で貧困から脱しました。つまり今日、グラミン銀行の借り手の半分は貧困から脱し、グラミン銀行に関して行われたあらゆる研究において、独力で事業を行うことにより人々がどれくらい効率よく貧困から脱することができるかが明らかにされています。

しかし一方で、貧困から脱出することが難しい家族について研究しましたところ、10年、12年、15年経ってもまだ彼らは貧困状態にあります。その共通の原因は何でしょうか。それは健康問題でした。家族に病人がいる場合です。夫あるいは父親が病気、またある場合には、働き手の女性自身が病気の場合などには、彼女が稼いでいるお金は病人の世話に当てられます。彼女は、毎年同じ限られた範囲の中を歩き回るだけで、広く動くことができず、その事業活動の範囲を拡大することができません。また、彼女の健康状態を気遣う人も誰もおりません。私たちには手頃な方法で保険加入を援助する貧しい人々向けの健康維持プログラムなどを進めようとしていますが、私たちのプログラムに占める割合はまだ非常に小さいのが現状です。

しかし今、健康問題に取り組む機が到来しつつあります。今回私たちが東京に来ることになりましたのはその時が到来したからです。私たちは徳田先生と医療法人徳洲会に心から感謝します。私たちは、たった今、徳洲会が日本で作られたたくさんの病院と同じ規模の病院を2つ建設するという協議を最終的にまとめ上げたところです。私たちは、バングラ

デシュでの医療活動に本格的に取り組むつもりです。これで、日本と同じ医療水準の病院が2つバングラデシュに建設されます。しかも、最も貧しい人々が最も素晴らしい医療を受けられるよう、バングラデシュで最も貧しい人々が受診できるようにすることを第一に考えた病院です。私たちは、この病院事業が持続可能なやり方で運営されるようにしたいと考えています。それは慈善病院ではありませんし、独立採算制の病院として存続させなければなりません。さらに医療サービスをバングラデシュで最も貧しい人々にもたすことができることを実証するための病院でもあります。私は、これが成功すると確信していますし、これは日本とバングラデシュの素晴らしい友好関係の証となるでしょう。これまでも日本のみなさんは、バングラデシュの特に貧しい人々の医療問題を克服するための活動を援助して頂いておりました。私は、この点で援助の手を差し伸べて頂いた日本のみなさんに感謝し、特に徳田先生と医療法人徳洲会に対しましては特別の感謝を申し上げたいと思います。将来再びここに来て、グラミン銀行と貧困についてお話しする機会があれば、是非、みなさんに医療プログラムについて新たなご報告をしたいと思います。私たちも今から、今回の件につきましての成果をお伝えするのを楽しみにしています。

私の時間が少なくなってきましたので、最後の点につきましてごく手短にお話しします。私は、金融機関に欠陥があり、政策に欠陥があり、概念枠組みに欠陥があると指摘してきました。そこでその最後の部分である概念枠組み部分についてお話しします。私たちが生きている現実の経済は、資本主義経済体制であり自由市場経済体制であります。自由市場経済では、貧しい人々にとっての緊張や困難が作り出され、貧しい人々を無視する結果になる公算が高いと考えられます。金持ちはますます裕福になり貧しい人々はますます貧しくなっていますが、それが現存する唯一のシステムであり、私たちはそれについて何もすることができません。共産主義は崩壊しましたし、今まさに私たちが頼ることができ、人々が人間として同等の尊厳を認められる可能性を期待できるような、代わりの社会システムはありません。

そして私は、この資本主義制度という特定の枠組みが非常に狭く解釈されていると主張しています。そしてこの制度の解釈の狭さがすべての問題の原因であり、貧困がグローバル化するにつれてより多くの問題を引き起こしていると考えています。グローバル化された世界では、貧困の問題が非常に多方面に拡大されます。他方、資本主義をより広く解釈するとこれはどうなるのでしょうか。狭く解釈すると何がもたらされるのでしょうか。一つの例として、ビジネスというものを狭く解釈した場合をご紹介します。資本主義の現在の概念枠組みでは、利益を出すことを目指すのがビジネスであり、経済学分野には他の種類のビジネスは存在しません。こうした理由からビジネスの基本は利潤の極大化となっていますし、また経済学の理論で思い描かれるシステムでは、すべてのビジネスマンあるいはすべての企業家は、利益を極大化するために行動するシステムの一員となっています。

私は、それは誤りであると考えています。人々は金儲けだけの存在ではありません。人々はそれ以外のさまざまな面を持っています。資本主義の狭い解釈では、人々のある側面が完全に無視されています。その一面とは、人は他の人々に役立つことで喜びを覚えるという点です。しかし経済学の分野では、人々は利他的にではなく利己的に振る舞うとされています。その部分が完全に間違っていて計算されています。したがって、私の考えを資本主義システムに組み込むとすると、ビジネスには2種類あるということになります。利益を出すビジネス、これはすでに存在する1つのタイプのビジネスです。それともう1つのタイプとしての人々に役立つことをするビジネスです。ビジネスをしたい人で、しかも人に役立つビジネスをしたいと考えるような人がいるのでしょうか。誰か思い浮かべることができるか考えてみてください。

徳田先生の場合はどうでしょうか。彼は最初のカテゴリーであるお金をもうけるビジネスに該当するのでしょうか。果たして彼は、日本で1番の金持ちになるために自分の時間を使っているのでしょうか。それとも彼は、2番目のカテゴリーに該当する事業家であり、人々の役に立つことを目指す事業家に入るのでしょうか。明らかに彼は、最初のカテゴリーに属する事業家ではなく、2番目のカテゴリーである人々の役に立つことを目指す事業家に属しています。現実にはそうした人々は存在します。しかし、経済学の分野がそうした人々の存在を認知していないのは明らかです。それを見落とすことによって誰がより貧困になったのでしょうか。まず、私たちの理論がより貧困なものとなりましたし、それにより私たちの世界も貧しくなりました。徳田先生や彼のような人々の存在に気づかないことによって私たちの世界はより難しくなりました。

今日この会場には、ビジネスによって社会問題の解決を目指す人になりたいと考えている多くの若い人々が集まっておられます。私たちは事業を望んでいますが、その事業が害毒を与えるものならばストップしたいと思います。私は汚染の問題を解決する事業を構想することができますが、それは事業として行うもののお金を儲けるためのものではありません。私たちが提唱しているもう1つのビジネス・カテゴリーでは、どれだけ利益を出すことができるのでしょうか。この事業も事業には違いないのですが、損失を出さない類の事業です。非営利組織と呼ばれる組織がありますが、それらは慈善団体です。私がお話しているのは、非損失事業、損をしない事業、ただし儲けることを目的としない事業です。目指すところは、より多くの人々に手を差し伸べることです。事業の形で、汚染に取り組む企業やホームレスの人々の問題に取り組む会社を設立することも考えられます。私はお金を儲けるわけではありませんが、ホームレスの人々の問題にも取り組んでいます。貧困問題に取り組むことを目的とするグラミン銀行は社会的ビジネスの企業です。みなさんは、グラミン銀行がたくさんお金を儲けているから私の話を聞いてくださっているのではあ

りませんね。私たちがここにいるのはお金もうけのためではありません。みなさんがグラミン銀行に興味を持っておられるのは、人々が貧困から脱するのを援助できるからではないのでしょうか。みなさんは、私たちがどうやっているのかを知りたいのだと思います。

今日、ここにいる聴衆のみなさんにグラミン銀行の株を売ろうと思えば、きっと多くの株を買ってもらえることでしょう。全員がグラミン銀行の株を進んで買ってくださるでしょう。私のもとには、世界中から「グラミン銀行の株を買うことができますか」という電子メールがたくさん寄せられています。では彼らはどういう意図を持っているのでしょうか。彼らはこの事業の一部となることはできますが、私たちの分野には、なぜ彼らを受け入れるシステムを構築する準備が整っていないのでしょうか。果たして彼らを受け入れる現実的な仕組みが存在するのでしょうか。現在、東京に存在するのは、東京証券取引所ただひとつです。そして株式取引所は何のために存在するのでしょうか。それは株を買うためであり、なぜあなたは株を買いたいかといえば、それはもうけたいからです。多分それ以外の目的はありませんし、お金を今日ほしいか明日ほしいかのそれだけの違いです。株価の値上がりを望むか配当を望むか、東京証券取引所によって表される指標はそれだけです。

私は、東京にもう1つの証券取引所、社会的証券取引所を設立することを提案したいと思います。私は、アフリカやバングラデシュ、あるいはそれがどこであろうと、女性に役立つ事業を行っている会社を探しに行くつもりです。子どもに役立つことを行う会社、スラム街、ドラッグ、犯罪から子どもたちを脱却させ、優れた教育と健康を与え、彼らが尊厳ある存在として認められるよう援助する会社です。東京社会的証券取引所に上場される価値のある会社は15社あります。私は、自分として一番支援したい会社を決め、その会社にお金を出します。そんな証券取引所に行きたいと思う人々がいると思いますか。私は何百、何千もの人々がこの社会的証券取引所に行くだろうと確信しています。また私の想像では、人々はきっと両方の取引所に行くと思います。お金儲けをしたい人々は一方にお金を持っていくでしょう。そして、人々の役に立ち、人間として他の人にとって役立つ存在であると感じたいと思っている人々はもう片方に行くでしょう。しかし私たちが知るかぎり、資本主義の経済学はこのような考え方をまったく無視してきましたので、これを正す必要があります。

私たちは、こうした社会的企業ならびに社会的企業経営者を見つけ、徳田先生のような人々がどんどん事業の世界に参入し、ビジネスの世界が営利目的以外の性格を帯びるようにしなければなりません。そうすれば選択肢ができます。何をどれくらいそうした企業に注ぎ込みたいと思われませんか。市場に占める社会的事業の割合が大きくなればなるほど、社会はよくなります。私たちがそのようなビジネスの世界を是正することができるとしても、始めはわずかな是正にしか過ぎません。しかしそれが、貧困のまったくない世界の実現に

つながるでしょうし、私たちはその実現を非常に強く信じることができます。世界のリーダーさえそれを信じ始めています。彼らは、2015年までに世界の貧困層の人口を半減させるミレニアム開発目標を宣言することから始めました。2015年までに貧困層の人口を半減させることができれば、いつごろになれば、世界から貧困を一掃することができるか想像してみてください。今から10年後に貧困者が半減すれば、貧しいままの人が世界から一人もいなくなるレベルに到達するのにさして何年くらいかかるでしょうか。これは私がみなさんに残すちょっとした算術です。
ご静聴ありがとうございました。

司会者：もう一度ユヌス教授に感謝の拍手をお願いします。ではプログラムの次のセッションに移りたいと思います。泉田洋一教授をお招きしたいと思います。

[テープ切れ]

泉田洋一教授：私は、グラミン銀行の経験を要約して私のコメントとしたいと思います。その後、私はユヌス博士がすでに言及された点についてお話しします。グラミン銀行がどのように大きくなってきたかの歴史については言及されましたので省略したいと思います。私のコメントは3つの情報源に基づいており、これらのファイルにはインターネットを通じてアクセスすることができます。

グラミンの歴史につきましては、時間に制約があるため私の説明を飛ばしたいと思います。この部分につきましてはすでに言及されています。そこで私は、グラミン銀行の成功の理由に移りたいと思います。

グラミン銀行の業績は目覚ましいものがあり、私たちは研究者として、グラミン銀行がなぜこれほどまでに成功したのだろうかかねがね不思議に思っておりました。この大成功を説明する理由としていくつかのことが考えられます。私は、成功の理由を4つ列挙してみました。第1の理由は、貧しい人々、特に女性に希望を与えたこと。第2の理由はその方法として、非常に簡素で、柔軟性に富み、かつ有効な方法を採用したことです。第3は、貸出業務が、自助努力を基本とした、革新的な姿勢を作り出すように設計されていること。そして第4番目の理由は企業家精神の重視です。

援助の成功にとっての最も重要な要素に関して説明しましょう。援助の分野における開発経済学では、次のような魚の例え話がよく使われます。魚を獲得する際の支援方法にはいくつかあります。1番目の援助は人々に直接魚を与えると援助です。2番目は、魚を捕らえる方法とともに人々に漁網を与えるといった援助です。もちろん、人々を支援する方法と

しては一番目よりこの2番目の方が望ましいでしょう。しかし、それでもなお、これらの2つの援助方法を受け取る人々には問題が残ります。

私は、グラミンのやり方はそれらと異なっていると思います。グラミンのやり方は独力で自分たちの状況を克服する方法を見つけることができる力を人々に与えるやり方です。その結果、この種の援助を受けた人々は、非常に活動的で革新的になります。グラミンの方法にはやる気を強化するという要素が含まれています。

私はインターネットでユヌス博士のいくつかの記事と講義を読みました。その中で私の感じたことはユヌス教授は、非常に楽観的ということです。、時として彼があまりに楽観的すぎるのではと感じるほどです。彼は常に人々の潜在能力を信頼しています。彼はまた非常に活動的な人物ですし、アイデアに富んだ人です。

彼のアイデアは非常に簡明で単刀直入でありながら、非常に強力なものであります。一例を挙げてみましょう。貧困を終らせる最も重要なステップは、貧困層に雇用と収入の機会を創出することです。この場合、正統派経済学は賃金雇用しか認めていませんが、彼は、雇用機会がない場合には自らが雇用を創出するよう助言しました。自営は貧困層にとって雇用を作り出す最も手っ取り早い方法であり、グラミン銀行の融資はそもそもそのためのものなのです。

次に社会的企業家というアイデアについてであります。このアイデアにつきましても、今日の講演の中で述べられました。これもまた非常に面白い考え方です。しかし私は、この考えに対してはいくつかの疑問点があると感じています。私の理解では、個人利益を求める動機は非常に強く、社会的目的による動機よりも強い場合があります。

したがって個人利益第一の投資家を擁する企業が社会的企業と競争すれば、社会的企業が競争に負ける可能性もないわけではありません。

時間の制約があるため、お話しする予定だった多くの点を省略してしまいました。以下は私の最後の指摘です。

まず私がバングラデシュのみなさまに指摘したいことは、バングラデシュは世界で最も貧しい国の1つですが、こんなにも影響力のある革新的な人を輩出していることです。時々、私はバングラデシュの人々を羨ましくさえ思うことがあります。ユヌス教授はかつて、将来いつか子どもたちは貧困がどういうことなのか分からなくなるときが来るとっておられました。貧困を教えるために私たちは博物館に彼らを連れていかなければならなくなる

ことでしょう。しかしある国が、若い人々が取り組むことができる社会問題を抱えているということは、ある意味では非常に幸運なことではないでしょうか。今、私たちの国日本ではこのような社会問題を抱えていません。が、私は、私たちが取り組まなければならないようなこの種の非常に深刻な社会的問題が、今の日本には必要なのではないかと思います。

2つめの指摘は、経済学の役割の低さについてです。今日の講演でユヌス教授は、経済学を使った非常にエレガントなモデルについて批判的に言及されました。しかし、ユヌス教授の論文を再読し、インターネットで彼の講義を再読すれば、彼の議論の進め方が経済学者の議論の進め方であることに気づくでしょう。またおそらく、経済学を学ばれたユヌス教授の経験は、さまざまな問題提起方式や、非常に本質的なポイントの分析方法において、何らかの助けになっているのではないかと思います。私は経済学者の一人なので、この点を確認できて少しほっとしています。

もちろんユヌス教授に尋ねたい疑問点は他にもいくつかあります。しかし、時間の制約のために、私の発言はここでおしまいにして、残りの質問をここに集まった学生たちにゆずりましょう。

ご静聴ありがとうございます。

司会者：学生のみなさんをお願いしますが、質問は1人1つにしてください。その後、ユヌス教授に一括してお答えいただきます。

品田諭志 氏 (農学部)：私はユヌス教授が貧困のない国を作る非常に革新的で有効な方法であるマイクロファイナンスに着手されたことに非常に感動しています。現在私は東京大学で経済学を勉強しており、将来貧困を解消するために大きな役割を果たしたいと望んでいます。私は、経済理論を勉強していますが、研究と実践の間のあるギャップを時々感じます。理論と実践をどう組み合わせればよいのだろうか。先生の経歴から考えて、先生のグラミン銀行における成功は、少なくともある程度まで学問研究のバックグラウンドに負うところがあるのではないかと推測しています。先生は経済理論が役立たないとおっしゃるかも知れませんが、しかし私には、理論と現実を組み合わせる方法があると思われます。こうした点を踏まえて、どうすれば経済学を深く学び、またグラミン銀行のような革新的な考えを創造するために何をして経済学の研究を補完すべきか具体的な忠告をいただけないでしょうか。

氏名不詳の発言者：ご講演ありがとうございました。先生が、グラミン銀行のシステムによって特に女性を支援されていることに感謝しなければならないと思います。私の質問は

緊急事態におけるケアについてです。ご存知のように、津波による大惨事がアジアを襲いました。先生のお国でも洪水のような同種の大惨事を経験されています。私の質問は、一時的な自然災害のような緊急事態の場合に、なにか特別な対処法があるのでしょうか。

庄司匡宏 氏(経済学研究科)：ご講演、ありがとうございました。私は博士課程に所属しております。ご講演は非常に印象的でしたし、マイクロクレジットにも興味を感じました。しかし、本日の私の質問は融資ではなく無償援助についてです。グラミンや他の金融機関は、自然災害、例えば 1998 年や昨年の洪水の際に経済的援助を行っています。私は、それが非常に重要な活動であると思っています。しかしいくつかのレポートでは、政府職員が農村地帯に住んでいないため、政府は誰が貧困状態にあるかを特定できず、そのために、政府による社会的支援は実際に貧困世帯に達することがないと言われていています。対照的にグラミン銀行とその他の金融機関との間の際立った特徴の 1 つが農村世帯と密接なコミュニケーションを持っている点にあると思われまます。そこで私の質問は、実際に貧困な世帯が社会的支援を得ることができるよう、グラミンが各村のローカル・ネットワークによって情報収集の問題を解決できるかどうかという点であります。よろしくお願ひします。

新保瑠美 氏(農学生命科学研究科)：先生の刺激的な講演、ありがとうございました。私は泉田教授の研究室で修士課程に在籍しております。私は先生に 3 つの点についてお尋ねしたいと思います。すみません。質問を 1 つに絞らなければならないのですが、私には質問が 3 つあります。私の経験では、私は、貧困層の中でも最も貧しい人々はマイクロクレジットから実際に利益を得ないと思っています。彼らは企業融資だけでなく、生きていくために消費融資が必要です。第 1 の質問は、物乞いに融資を与えることに関して発言された内容についてです。私は、グラミン銀行が貧困層の中で最も貧困な人々にまで事業を及ぼすことができた理由を知りたいのです。第 2 の質問は、グラミン銀行は現在商業化された状態にあるとお考えになっているかどうかです。第 3 は、マイクロファイナンス機関の商業化と最も貧困な人の貧困緩和とが両立するという考え方を先生が支持されるかどうかです。

ユヌス教授：さて、非常に重要な質問をみなさん本当にありがとうございます。みなさんに満足のいく答えができるかどうか分かりませんが、努力しましょう。まず、社会的企業経営者が存在するかどうかに関する最初のコメントに戻ってみましょう。これは私の見方ですが、彼らは存在しています。社会的企業経営者は存在しないという見解もありえます。利潤という動機が社会的意識より強い動機かどうかについては賛否両論があります。どれが人間にとってやむにやまれぬ衝動でしょうか。私自身の感覚では、人間にとって社会意識のほうが利潤動機よりはるかに強いと思います。

特に、社会意識の側には“感染力”があると私は思います。誰かが他の人に役立つことをできると示せば、他の人も「じゃあ私もやってみよう」という気になります。それは直ちに他の人々の心に響き、それは人々の感情や人々のより大きな価値観や考え方などを揺さぶります。経済学や経済学の文献が作り出した経済世界からしばらく出て、政治、社会福祉事業、および宗教に目を移すと、自己犠牲的な人々が宗教や政治の世界に存在していることが分かるでしょう。それらの人々は自分たちの生涯を捧げています。自分の国や国民にとって何事をもなしえないことで自殺する人もいます。自分の国の政治にとってあることが重要だと考え、刑務所で一生を過ごす人もいます。他の人々を助けたいと非常に強く願うためにそうするのは、それが経済世界に入ったとたんに、なぜか彼らの存在はすべて消え去ります。金儲けのことだけを考え、他の人のことを忘れた人たちがばかりの世界になるように見受けられます。しかしこれが真実であるはずがありません。というのもこれらの感情はすべて人間の感情だからです。したがって、人間の感情を簡単に捨て去り、なしにしてしまうことはできません。それは間違いで、人間の生活の一面しか取り上げていません。また、それは資本主義の理論が誤っている点でもあり、私たちが是正させなければならぬと主張している点であります。ところがこうした仮説が採用されてきたのは、私たちのニーズを手早く抽象化する手段として使えたからです。しかし、人間がどのように振る舞うかを説明しようとした場合、人は金儲けをしたいだけだというのは絶対的に狭隘な解釈です。

私はこのような理由から、一旦私たちの理論にこうした人々を組み入れれば、多くの人々が、「私たちはこういう方法を知りませんでした。どうしてこれまで思いつかなかったのでしょうか。今から私たちはそれに参加したい」と言い出すはずだと私はいつも言っています。例えば、大学の経済学のクラスでの若い人々に、お金儲けをするために事業家になりたい人がどれだけいるか、あるいは、他の人の利益になる事業をしたいと思う人がどれだけいるかについて投票してもらいましょう。いずれの方法とも利用できることを説明し、どちらの事業家に投票したかを見てみた結果が、彼らの最初の反応です。そしてそれが、若い人々がどのように特に自分自身と自分たちの将来を見ているかを推し量る目安となるでしょう。シナダさんからの質問にありました現実と理論の間のギャップに関しては、このことが関係しています。現実には、常に私たちの目を開いて見つめる必要があるものなのです。

私が今日お話したかったことの1つは、研究することが逆に私たちの目を曇らせるという点です。研究し知識を得ることは、より多くの洞察を得、事態をよりはっきりと理解する助けになると思われています。しかし私の感覚では、現実ほとんど逆です。私たちは、説明を受けてきたその方法自体によってものごとが見えなくなっています。この方法が絶対的に正しいとは限らないことを理解するためには、教師の側と学生の側の双方が懸命に努力しなければなりません。特に社会科学の場合は、それが非常に重要です。現在の社会

科学は一種の作業仮説や進行中の作業の一部に過ぎません。学生であるあなたの仕事は、それを次のレベルに高めることができるかどうかを見極めることであって、既成の経済学を無批判に受け入れるとすればそれは危険極まりないことです。なぜなら経済学は人間を対象とした学問だからで、私たちの考えは絶えず変動します。社会の体制や権力の配置なども私たちにとっては重要なものです。私たちは、つまらないやり方で学問に寄与したくはないと考えるもので、しかじかのことを立証したりこき下ろしたりするために何かを書くのではなく、システム全体を作り変えるのに役立ちたいと考えます。そこに私たちの挑戦、新しい世代が挑戦すべき課題があるのです。

それでは、あるべき世界とはどのようなものでしょう。新しい世代にとっての最初の出発点は、あなたの質問にならって言うと、あたかもあなたが全世界を作り出している存在であるかのように「どんな世界を作り出したいかを定める」ということです。その世界が何を必要としているかを具体的に描くこと、それが取り組むべき課題です。一旦、今から 20 年後や 25 年後の世界を素描できたら、再び 2005 年に立ち返ります。そしてどうしたら 20 年後の世界に至ることができるのか、そこに至るには何が必要かについて考えます。努力することによって目標に近づけるからこそ努力するのです。だから努力する前に、その世界はどのようであればならないかを明確にしなければなりません。

現状に満足しないでください。それは非常に間違った態度です。そのような態度では、私たちは同じところをぐるぐる回るしかなくなります。それは進歩ではありません。進歩とは、あなたが決心すること、それがあなたの現実であり、あなたがその方向へ向かうことです。それが若い人々が挑むべき課題ではないでしょうか。もし私が自分の好きなように世界をデザインできるとすれば、その世界がどのようなものであれ、私は誰一人として悲惨な状況で苦しむことのない世界をデザインすることでしょう。私の仕事は、世界から悲惨な生活や貧困に苦しむ人が一人もいなくなる状態に、どうすればそこに到達できるかを考えることです。

私たちがバングラデシュで対処している緊急事態について考えてみましょう。ご存知のようにバングラデシュは災害の国と評されています。なんらかの災害がいつも起こっています。小さな洪水はしょっちゅう起こっており、新聞にさえ報道されませんが、特に巨大な洪水が問題です。洪水が本当に大きな全国規模になると、世界中の一面に取り上げられます。そしてその洪水によって何百万もの人々が家を失います。しかし何万人もの人々が家を失っても、バングラデシュでは新聞紙の一面を飾ることがありません。何百万という数に到達して初めてニュースになるのです。

昨年 2004 年にもひどい洪水がありました。人口の半分が洪水の被害を受け、何百万人もの

人々が家を失いました。このようにこれが私たちの生活の一部であり、私たちはこの出水を治めることができません。私たちはこれについて、どうすれば洪水を治め管理下に置くことができるか考え続けています。しかし私たちはまだその解決策に辿りついていません。バングラデシュで建設する施設はすべて洪水や災害への対策を備えたものでなければなりません。そうでなければ流されてしまうのです。私たちは、グラミン銀行を設計するとき、万全な洪水対策および災害対策が組み込まれていることを確認しており、現在はそれらの対策が組み込まれています。災害時の対策手順が事細かに決められており、災害が起こったときに何をすべきかについても詳細に定められています。

その一例として、洪水が起こった場合についてもう少し詳しく検証してみましょう。私たちのスタッフはみんなよく認知していることですが、たとえ辺鄙な村で洪水が起こっても、ダッカの中央事務所が何も知らないことがあります。その時スタッフは何をすべきなのでしょう。私たちの規則には次のように定められています。担当している地区がなんらかの災害に見舞われたときには、スタッフは直ちに被災地宣言を出します。そして、被災地宣言と同時に、グラミン銀行の当該支店全体を人道援助組織に転換します。それはもはや銀行ではありません。それは人道援助組織となります。銀行のスタッフは人々を救うために走り回らなければなりません。これがそのときの彼らの仕事です。すべての銀行業務は停止します。人々を救うこと、借り手を救うこと、借り手ではない人々も救うこと、彼らに水に浸かっていない場所やシェルターを見つけ、食物を調達し、救急医療を確保ことが最優先になります。これらをすべて、スタッフがやらなくてはなりません。スタッフは「ごめんなさい。私も被災したのです」といういい訳はできません。そんな言い訳はノーです。ここではスタッフは、人道援助団体の役割を引き受けることになるのです。

あなたは、どこにお金があるのか疑問に思われるかも知れませんが、グラミン銀行のお金を使って結構なのです。そのためのお金はスタッフが自由に使えます。私たちは何も質問しません。お金を使って人々を救うことがスタッフの仕事です。スタッフが外に飛び回っている間に私たちが戻ってきてスタッフを支援し、他の人々、特に子ども達を助けることができるように支援します。洪水が起こると多くの子どもが犠牲になります。家族は洪水が起こるとすぐに屋根の上に避難します。屋根の傾いたどんな粗末な家であっても彼らは屋根に上ります。家が水没するからです。子どもたちも家族といっしょにいて、家族は子ども達を守ろうと努力します。しかし、母親が眠ってしまうと小さな赤ん坊は水の中に落ちてしまいます。母親が目覚まして赤ん坊がいなくなったことに気づき、赤ちゃんの遺体が後になって見つかるといったことが起こります。これは非常に危険な状況です。しかしこのような状況で、大丈夫ですからしばらくここで暮らしてください、というのは簡単ではありません。人々はずっと生き延びようと絶えず奮闘してきました。だから彼らを守る他の方法を見つけて、屋根の上から連れ出さなければなりません。子どもたちが眠るこ

とができるような乾燥した場所を見つけ、食料を配るといったさまざまなことが必要になります。これが状況の詳しい説明です。

その後に来るのは復旧段階で、その課題は、被災した人々を家に戻す活動です。グラミン銀行は、家を一から再建するために直ちに住宅融資を行います。「新たに融資を行いますので、それで損失を取り戻してください。そうすれば、再び種子でも何でも必要なものを買いはじめることができます。そうして再びやり直すのです」というのが私たちの方針です。私たちが高く掲げ、スタッフにも常々言い聞かせている規範となることは、人々が死んでしまったらグラミン銀行が生き残ってもなんの意味もないということです。そもそもグラミン銀行は誰のために存続するのでしょうか？もし人々が生き残れば、グラミン銀行も生き残りますし、そうでなければグラミン銀行の未来には何の意味もありません。これが、私たちがどのように対処しているかの説明の1つです。

今回の大津波。そうです、これも同種のことです。最初の救援活動は申し分ありませんでした。なすべきことはすべて行われました。しかし最初の救援活動の後に、最も重要な部分がやって来ます。彼らの生活再建をどうやって行えばいいのでしょうか。家族を失った人々の生活はどうすれば再建できるのでしょうか。預金も何もかも失った人々は、どうしたら立ち直ることができるのでしょうか。慈善活動を行い彼らにお金を与えることも1つの方法ですが、しかしおそらくそのようなお金は真の役には立たないでしょう。人々がお互いに励ましあい、鼓舞しあえる制度の整備が必要になります。彼らが経験したショックを受け止め、新しい生活を再開し、新たな生活に目を向けさせるようにするには制度の整備が必要です。これは家族が耐え忍ばなければならない試練の時です。

無償援助について、彼が言うようにグラミンは無償援助を行っています。無償援助あるいはそうしたすべてに対する私の基本的な立場として、無償支援や援助にはまったく異論はありません。しかしその期限を区切る必要があります。無償支援や救援物資は無期限であってははいけません。人々がいつまでも援助に頼って生活したり、寄付に頼って生活したりすれば、彼らは自分の面倒を見る能力をすべて無くしてしまい、自分の力で生活していく意欲を失います。人を人らしく支えているのは困難に挑む能力です。したがって、彼らの困難に挑む能力を妨害することはすべきではありません。人の生活は、挑戦に次ぐ挑戦の上に築かれます。それが人生というものであり、人に施しを与え月々の福祉給付を与えてしまうと、彼らの生活は一変してしまいます。

西側諸国で行われている形での福祉制度は、私の見方で表現するとすれば、貧しい人々やその他の恵まれない人々や失業中の人々に、まるで人間の動物園のような世界を作っているようだという印象です。動物たちのいる動物園と同様、健康な動物つまり人々が集めら

れ、あなたは食事を与え、彼らの面倒を見て、世話を焼き、彼らの健康をチェックするために医師が待機しています。しかし、彼らは本当の動物ではありません。そこは彼らが本来いるべき場所ではなく、彼らが何かに意義を見つけ、本来の活動を行う場所ではないのです。担当している多くの人々が国や地域や社会によって扶養されているとしたら、彼らは人間本来の機能を果たしていないこととなります。挑戦者、創造者、ならびに創造的な人間としての本能を捨て去ってしまいます。このことは人間にとっての大きな損失です。

したがって、本当に必要なことは徐々に環境を築くことです。人々が闘い達成できるように支援することです。適切な支援体制が整備されておらず、闘いを支援する準備も整っていないければ、闘っても意味がない場合もあります。例えば私たちの銀行業務について例を挙げますと、たとえ人々に自分で働いて稼ぐように勧めたとしても、私にお金がなかったとすればどうでしょう。私にお金がなければ、どのように彼らにお金を稼がせることができるでしょうか。働いてお金をもうけるように説得する前に、金融機関を設立することが必要です。これらが、私のところで行っている無償援助についての事柄です。

みなさんは、政府機構がうまく機能していない点を指摘されました。確かにそのとおりです。というのも官僚たちの思惑は、行動が必要な部分に実際に踏み込むのではなく、トップの人々を喜ばせることにあるからです。彼らは、本当に課題に取り組むのではなく、机の上で書類を操作しているだけのようなものです。実に嘆かわしいことです。誰が貧しいかは、そんなに極秘のことでしょうか。その現場に行けば誰が貧しいのかは一目瞭然です。あたかもこれが非常に大きな秘密であるかのように私たちは事実を覆い隠す傾向があります。KGB や CIA を現地に派遣しなければ、誰が貧しいか分からないのでしょうか。そんな類の話ではありません。単に私たちが見つけ出そうとしないだけです。ちょっと歩き回り、近所の人たちをチェックすれば、誰が貧しいか、誰が貧しくないかがすぐ分かります。そしてこれは他のどこについても当てはまります。2015 年までに貧しい人々の数を半減させたいと主張したとしても、今どれくらい貧しい人がいるか、どのような人々なのかさえ知らないとすれば、どうやってそれを達成するつもりでしょうか。最初にやらなければならないのは、貧しい人々の名前を列挙し、2005 年のリストを作ることです。今年あるいは今月どれくらいの人々が貧困から脱することができるでしょうか。これは、今日は 10 人、明日は 15 人というように貧困から脱する人を積み上げていかないかぎり、2015 年までに貧困人口を半減させることはできないからです。毎月毎年の積み重ねの末に 2015 年までに、貧しい人々の半分を貧困から救出することができるのです。

したがって、それは、実際に行動を起こすかどうか、自発的に行動を起こすかどうかにかかっています。これは、難しいタフな決断です。私たちは明確に努力しなければなりません。しかし、集中的に努力しなければならないのはわずか 10 年だけです。今は 2005 年で

すから 2015 年までに全部が終わるはずです。2015 年になって「何か他の歌を歌おうよ。2015 ミレニアム開発目標なんて古い歌は忘れてしまおう」などと言うことは許されないのです。決定したのにそれを実施しようとしなかったことになればこれは人類の全体の恥です。すし、これは私たちが積極的に努力しなければならない課題なのです。

しかし、物乞いプログラムで私が言及したのは貧者の中で最も貧困な人たちです。そうです。彼らは生き延びるために多くのものを必要としています。しかし、収入は生存の第一の要素です。どうやれば彼らは収入を作り出すことができるのでしょうか。すでに述べましたように、彼らの手に融資を与えることで、自分たちでお金を得る何らかの方法を作り出すことができます。先ほどみなさんに、電話サービスを売ってお金をもうけているテレフォンレディーの話を紹介しました。そこでこの物乞いプログラムで私たちは、「物乞いの女性の一人に電話を与えて、彼女がそれをどう生かすか見てみませんか。」「物乞いの女性に融資するのがなぜ駄目なのですか。これも結局は融資の一形態で、他の誰かに融資できるのなら、物乞いの女性にもできるはずですよ」という話し合いをし、彼女は電話ビジネスを開始してそれによってお金をもうけ、ひとかどのことをやりとげました。しかし一方では「彼女には電話を扱う能力がない。彼女は、電話の仕組みも分かっていない。彼女は、電話の言語も理解していない」などと言う人もいました。それに対する私たちの言い分は「そうかもしれない。しかし、グラミン銀行が資金を出して融資として彼女に電話を与えれば、彼女は非常に頭のよいパートナーを見つけ電話事業を営むことになるのです」というものです。このパートナーは電話事業のエキスパートです。しかし、あくまでも電話の所有者は物乞いの女性であり、そこで私たちは提携します。彼女はパートナーと経営契約を結び、働いて会社を営み、私たちは利益を分け合います。この方式はどこでも通用します。賃貸できる家を持っていれば、賃貸しませんか？貸し出してお金をもうけたらどうでしょうか。あるいは、共同事業を行い、あなたが金を持っており彼女が技術を持っている場合、あるいはあなたが設備を持っており彼女が技術を持っている場合などのいずれの場合も可能です。

「いや、お金は貧しい人の役に立ちません。何か他のものが必要です」と言う人もいます。しかし、これは誤解です。誰もが他に何かを求めようとします。お金以外の何か他のものを必要とするのは貧しい人だけだと言うのでしょうか。誰もが健康を必要としますし教育を必要とします。誰もが他のあらゆるものを必要としますが、私たちは、融資しか与えてはならないとは言っておりません。そこでマイクロクレジットをほとんど次のように解釈する人もいます。「貧しい人々にマイクロクレジットを与えるというが、どうだ見てごらん、彼らにはそれだけしか与えられていないではないか」と。しかし私たちはそんなことを言ったことはありません。私たちは、他にも、できるかぎりのものを与えています。しかし、マイクロクレジットのことを是非忘れないでください。これは非常に助けになり

ます。私たちはそのことを強く主張しているのです。

貧しい人々、最も貧しい人々は他のものを必要としており、他の人々がそうではないとは考えないでください。誰もがそれ以外のものを必要としており、それは貧しい人も同じです。しかし最も貧しい物乞いの人たちに電話を配るといようなマイクロクレジットを準備すれば、それが土台になりその後他のものを注ぎ込むことが非常に簡単になります。ヘルスケアが実現可能になり教育が実現可能になります。グラミン銀行から融資を受けているすべての女性と 400 万に上るすべての世帯を見てください。子どもたちは学校に通っていますが、グラミン銀行が組織されていなければ、それは不可能だったでしょう。グラミン銀行が組織されていなかったら、彼らに学生融資を与えることもできなかったでしょう。

こうしたことが実現できたのは、すべて私たちがグラミン銀行を組織することができたからです。しかし私たちは保健サービスを導入することまではできませんでしたので、徳田先生に最貧困層の人々がすぐに利用できるヘルスケア・システムを提供してもらえないか相談することにしたのです。私たちは、私たち自身が組織した 400 万世帯の家族が医療から締め出されていることを知っているからです。また、グラミン銀行は今や1つだけではありません。グラミン銀行のような事業を組織している団体は他にもたくさんあります。対象となる世帯が組織されているので、彼らに手を差し伸べることが非常に容易になりました。このようにマイクロクレジットは、単にそのお金の部分だけにとどまるものではありません。話されていることは精巧なシステム全体のことであり、それが非常に重要になります。

商業化、それはビジネスの世界へと私を連れ戻します。お金をもうけるビジネスと人の役に立つビジネス。マイクロクレジットについても、どんなマイクロクレジットですか？ お金をもうけるマイクロクレジットですか、それとも人に役立つマイクロクレジットですか。グラミン銀行に関わる私たちは、人々に役立つことをするためのビジネスを選びました。ところが誰かが「私たちはマイクロクレジットをもっともっと良くしたいし、もっともうかるようにすることができるので、それをやりに行きましょう」と言うかもしれません。でもそういう人たちにはやらせておきましょう。金融業者は、人類がこの惑星に登場して以来の大昔から、この仕事をやっています。金融業者はいつも貧しい人々に金を貸し、そしてその過程で貧しい人々の血液を最後の一滴まで搾り取っています。それが商業化だというならおあいにくさまで、私はそんなビジネスは致しません。しかし、あなたがそれをやりたいなら、どうぞおやりなさい。私たちはそんな連中と張り合うつもりはありません。それが商業化なのです。

商業化がビジネスとしてそれを実行することを意味するなら、グラミン銀行は、ビジネスとして運営され利潤を生み出しています。昨年、2004年には、少なくとも1600万米ドルの利益がありましたので、グラミン銀行は貧しい人々が所有している、利益を生み出す組織といえます。グラミン銀行が銀行となって以来の最初の3年だけは決算が赤字でしたが、それ以降は毎年黒字です。したがって、私はこの点で異論はありません。だからみなさんがたの1人がおっしゃるように、社会的企業かつ非損失組織なのです。ところで私が力説している要点は、グラミン銀行がお金をもうけているという点ではありません。もちろんそれもこの銀行の素晴らしいところですが、人々に手を差し伸べる姿勢こそがこの銀行の最も素晴らしいところで、マイクロクレジットのこうした点が私の心を惹きつけてやみません。しかし、利己的な目的でお金をもうけるためにマイクロクレジットを誰かが経営したければ、どうぞ世界は開かれていますのでやろうと思えばできます。それが商業化の意味するところです。

しかしその結果が貧困に結びつくのです。私たちの場合は、マイクロクレジットの利益を誰か他の人々が持ち去るのではなく、貧しい人々に、できるかぎり還元したいと思っています。貧しい人々が、できるかぎり有効に利益を使い、なるべく早く貧困から脱するために還元したいのです。融資以外のすべての必要な要素はそれを軸に組織することができます。私が情報技術についての話で、情報が彼らの手に届かないものとはならないよう、彼らに情報技術を届ける最善な方法について述べたように、彼らはいつでも必要な情報にアクセスできます。その結果、その間に誰かが介在して、仲介者としての自分の立場を利用したり、貧しい人々に間違った情報や悪い情報を与えたりすることができなくなります。また彼らは情報の出所にさかのぼって自分で判断を下すことができます。医療や教育、そしてもちろんマイクロクレジットについても決断を下すことができます。一旦私たちが条件を整備することができれば、彼らを再び貧困へ押し戻し貧しい生活にとどまらせることはできないと思います。誰もそんなことはできません。人々は、自分たちが押し込められていた穴から飛び出し、世界中のすべての人とまったく対等な存在となることでしょう。

ご静聴ありがとうございます。沢山の質問を頂戴し感謝しています。これらは非常に重要な質問でした。私は、みなさんが今日学ばれたように、今後も研究されることを望みます。本当にありがとうございました。

司会者：誰もが多くの質問をしたいと思っておられることでしょう。またさらに、東京の新宿でグラミン物乞いプログラムを始めることに興味を持っている人も数人おられます。しかし時間が迫っているため、残念ながら閉会の辞に移りたいと思います。

私ども東京大学経済学部長の神野直彦教授より閉会の辞を申し述べます。閉会の辞は、東

京大学大学院経済学研究科 COE プログラム「市場経済と非市場機構の連関研究拠点」(CEMANO)の共同代表で元経済学部長の岩井克人教授より代読させていただきます。

岩井克人教授 CEMANO 共同代表、東京大学：分かりました。それでは、時間がないので手短に行います。

私は 3 つの立場を代表してこの場に立っています。1 つは今回の講演を共催した「市場経済と非市場機構との連関研究拠点」の共同代表として、もう1 つは、この研究機関構想を立ち上げ設立した経済学部の元学部長として。そしてもう1 つの、そして最も重要な立場は、現経済学部長の神野直彦教授の代理としてのものです。教授ご自身非常に残念に思っておられたことですが、神野教授はこのセミナーに参加することができませんでした。そのため私は代わりに務めなければなりません。

私はみなさんと同様に、この講演に深い感銘を受けました。時間が許せば、3 つの立場からの謝意をそれぞれに表したいところですが、時間がないことから、神野教授に代わってユヌス教授へのメッセージを代読するのに止めます。このメッセージは神野教授が書かれたものです。これから手短かに代読致します。

ユヌス教授の講演会を主催できたことは、私たちにとって大きな名誉であります。東京大学経済学部を代表して、私は、ユヌス教授およびすべての参加者に対する謝意を表します。

国民経済が単一のグローバル市場に統合されていく最近の動向は、グローバル市場の基準自体に鋭い矛盾を生じさせる一方で、地域特有の政治システム、社会構造、文化規範にも鋭い矛盾を生じさせています。そしてこれらの矛盾は、市場経済と非市場機構の間のギャップを埋める方法を早急に見つけ出す必要性を生み出しています。

1 年半前、東京大学経済学部は、市場経済と非市場機構の間の直接的な関係を解明できる包括的な知的枠組みを実現することを目的とする国際的研究センターをアジアに設立することを旨として、21 世紀 COE プログラム「市場経済と非市場機構との連関研究拠点」(CEMANO)を発足させました。その 1 つの重要な研究テーマは、経済開発、特に貧困をなくし人間開発を促進する上での非政府機関と非政府組織の役割についてであります。

言うまでもなく、グラミン銀行はそのような組織のなかでも最も成功した試みの 1 つとして高く評価されており、それがきっかけとなって起こったいわゆるマイクロクレジット革命は、発展途上国の何百万人という人々が貧困から脱却するのを強力に支援しました。このことを見ても、グラミン銀行プロジェクトは人類にとって最も貴重な知的財産の 1 つで

あると言っても過言ではありません。

この知的財産は、私財ではなく世界中の誰もが自由に利用できる公共財であることを私はうれしく思いますし、そして代読者である私にとっても同じ喜びであることを申し添えたいと思います。

この場におきまして、私は、長年にわたり貧困との戦いに尽力されてきたユヌス教授とグラミン銀行の彼の同僚のみなさんに心からの尊敬と賞賛の念を表明したいと思います。

ご講演ありがとうございました。

司会者：私は、素晴らしい講演を行ってくださったユヌス教授、そして本日参加され、本日の講演会の開催に協力してくださったすべての方々に心から感謝致します。さらに今後、ユヌス教授ならびにグラミン銀行から本当の経済学と未知なる経済学の領域についてさらに深くお話をお聞きできることを願っております。

さてこれで、今日のムハマド・ユヌス教授による講演を正式に終了したいと思います。どうか大きな拍手を・・・。

ユヌス教授：1つだけ付け加えさせてください。私の教え子であり、バングラデシュのチッタゴンの村でグラミン銀行の事業に着手して以来の私の同僚であるデヴァルトが今日ここに来ています。彼はグラミン銀行のナンバー2の人物です。

私たち2人が会合に同時に出席することはごくまれなことなのです。というのも、いつも彼がダッカにいれば、私がここかしこに出かけているという状態だからです。私は学生たちと事業に着手したのですが、私が学生たちに話を持ちかけ、彼らを現場に連れて行ったとき、彼は私の事業に協賛した最初の一人でした。彼は、他の多くの学生と同じようにグラミン銀行に残り、仲間とともに今日のグラミン銀行を築いてきたのです。